

8 奄美の哺乳類

奄美諸島は鹿児島県の最も南にあたり、奄美本島、喜界島、徳之島、沖永良部島および与論島の五つの島で構成されている。

奄美諸島の野生動物は、日本本土の動物と比較して大変ユニークで、学術的にも貴重である。種子島・屋久島のさらに南のトカラ列島に渡瀬線という動物地理学上の線があり、その線を境に北が旧北区、南が東洋区として区分されている。島伝いの移動能力に欠けた哺乳類はこの線で動物相ががらっと変わる。鹿児島県は日本で唯一、温帯系の動物相と熱帯系の動物相を持っている県であり、動物の多様性に富み、天然記念物に指定された動物が集中している地域である。

奄美諸島の自然や動物は、今から約一千万年前の地質時代に起源を持ち、現在まで脈々とその姿をとどめてきた。生物相は古く、中国大陸や東南アジアでは既に絶滅してしまった種が遺存種（生きた化石）としていまだに生存している。この現象は、ある時代に隔離され、外部からの肉食獣や競争相手になる生物などの進入がなく、大陸では考えられないような弱い生物がいまだに繁栄している。まさに奄美諸島は「東洋のガラパゴス」といえる。

地史的な変遷を経てでき上がった奄美諸島は、高い部分が奄美大島や徳之島というような島になり、低い島は珊瑚礁の発達により陸地が拡がり喜界島、沖永良部島および与論島というような隆起珊瑚礁の島になった。特に奄美大島や徳之島は貴重で古いタイプの珍しい生き物たちが多い。

哺乳類は国の特別天然記念物に指定されたアマミノクロウサギがあり、他にアマミトゲネズミ・ケナガネズミが天然記念物になっている。奄美産の哺乳類について環境庁編 レッドデータブック（日本の絶滅のおそれのある野生生物）の掲載種は、危急種（絶滅の危険が増大している種または亜種）としてワタセジネズミ・アマミノクロウサギ・アマミトゲネズミ・ケナガネズミがあり、希少種（存続基盤が脆弱な種または亜種）にはオリジネズミがある。また、徳之島のリュウキュウイノシシは地域個体群（保護に留意すべき地域個体群）として掲載されている。

従来の奄美の哺乳動物の調査研究は哺乳類全般についてのものや狩猟鳥獣に関するものはあるが、種別の調査は少ない。南西諸島の哺乳類相の特異さについては大嶺(1987)、安間(1995)、Sassa(1977)が詳しい。各種類ごとの一般的解説は阿部(1994)、今泉(1960)、鮫島(1995)があり、文化財（天然記念物）に指定された動物ならびにレッドデータブック掲載種は文化庁(1975)、環境庁(1991)がある。奄美諸島の各島ごとの動物相については鹿児島短期大学付属南日本文化研究所の南西諸島学術調査での筆者の報告がある。

上記の文献や資料を参考にし一部に著者の知見を加え、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島および与論島の哺乳類相を各グループごとに概説する。また、奄美諸島産哺乳類の分布状況は表-1のとおりである。

(1) 食虫目

奄美諸島に生息する食虫目にはワタセジネズミ・オリジネズミ・リュウキュウジャコウネズミの3種がある。ワタセジネズミは奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島および与論島に、オリジネズミは奄美大島に、リュウキュウジャコウネズミは奄美大島、徳之島、沖永良部島・与論島にそれぞれ生息している。

表－１ 奄美諸島産哺乳類の分布状況

* 既存文献および著者確認種
 + 著者の採集ならびに確認種

科 名	種 名	奄美大島	喜界島	徳之島	沖永良部島	与論島
トガリネズミ科	ワタセジネズミ	*	*	*	+	+
	オリイジネズミ	*				
	リュウキュウジャコウネズミ	*		*	*	*
キクガシラコウモリ科	コキクガシラコウモリ	*		*		
ヒナコウモリ科	アブラコウモリ	*		*	*	*
	ユピナガコウモリ	*				
ウサギ科	アマミノクロウサギ	*		*		
ネズミ科	ハツカネズミ	*		+	+	+
	アマミトゲネズミ	*		+		
	クマネズミ	*	*	*	*	*
	ドブネズミ	*	*	*	*	*
	ケナガネズミ	*		*		
イタチ科	ホンドイタチ（移入）	*	*	*	*	*
	マンゲース（移入）	*				
イノシシ科	リュウキュウイノシシ	*		*		
7 科	15 種	15	4	12	7	7

a) ワタセジネズミ

ワタセジネズミはレッドデータブックでは危急種に掲載され、アマミノクロウサギと同格の動物である。奄美諸島以南の東南アジアに分布するオナガジネズミの1亜種で、沖縄諸島・奄美諸島では河畔や農耕地周辺に生息している。

形態は頭胴長 5.3～6.0 cm前後、尾は 4～5 cm前後で、ハツカネズミ大の小さな食虫類。吻端（鼻と口）は細く尖っている。体の背面は褐色の強い暗灰色、下面は背面よりやや淡色。手足の背面は暗褐色で灰色がかかった短毛を生ずる。尾は上面が暗褐色で下面は淡色。

生態は感覚器官の耳と鼻はよく発達しているが、目は小さく視力は弱いほうで、夜行性。サトウキビ畑や林内に草を刈り取って積み上げておくと、よくその下にすんでいて、繁殖期には枯れ草などで鳥の巣に似た簡単な巣をつくる。

b) オリイジネズミ

オリイジネズミはレッドデータブックでは希少種に掲載されている。ジネズミの島嶼型大型種で、奄美大島からごく少数が知られているのみ。生息数はきわめて少ない。

形態は、頭胴長78～90mm、尾長51mm、ワタセジネズミよりはるかに大型である。背面の毛が長く手や爪が大きい。

生態は殆ど知られていない。

c) リュウキュウジャコウネズミ

ジャコウネズミは元を正せば人間に運ばれて分布を広げたもので、現在の分布域は、西は東ア

フリカやマダガスカルまで、東はニューギニア・グアム・日本を含む島々である。南西諸島の亜種のリュウキュウジャコウネズミも、古く船舶により移入されたもので、真の野生種ではない。インド・スリランカに生息するジャコウネズミよりも体色が濃いといわれる。奄美諸島の中では奄美大島は生息数が少ないが徳之島・沖永良部島および与論島ではかなり多く生息し、人家の周りや塵捨場等に多い。

形態は頭胴長12.4～13.7cm前後、尾は6.8～8.5cm前後。クマネズミよりはるかに小さい食虫類。吻はジネズミより太く短い。耳は大きく露出し毛は少ない。目は小さい。尾は付け根が太く、先へ次第に細まる。体色は黒～暗褐色。

生態は耳と鼻はよく発達しているが、目は小さく視力は弱い方で夜行性。日暮れになると外に出て、硬貨をチャラチャラ鳴らすような声を出しながら走り回る。

(2) 翼手目

奄美諸島に生息する翼手目にはコキクガシラコウモリ・アブラコウモリ・リュウキュウユビナガコウモリの3種がある。コキクガシラコウモリは奄美大島、徳之島に、アブラコウモリは奄美大島に、リュウキュウユビナガコウモリは奄美大島・徳之島・沖永良部島にそれぞれ生息している。奄美諸島は鍾乳洞の多い島もあり、洞穴性のコウモリの生息場所になっている。

a) コキクガシラコウモリ

コキクガシラコウモリは北海道の南部地域の一部・本州・四国・九州・佐渡・大島・三宅島・御蔵島・八丈島・壱岐・福江島・屋久島・奄美大島・加計呂麻島・徳之島・沖永良部島に生息していることが知られている。

形態は頭胴長35.0～50.0cm前後、尾は16.0～26.0cm前後、前腕長36.0～44.0cm前後。褐色系の体毛を持つ。

生態は、昼間は洞穴で集団で休息し、日没後に出洞して餌を求め、日の出前に帰洞する。食べ物は主に小型の飛翔昆虫であり、特にガ等の軟らかい昆虫が多い。

b) アブラコウモリ

アブラコウモリは日本では本州・四国・九州・対馬・種子島・屋久島・奄美大島に生息していることが知られている。

形態は、頭胴長41.0～60.0cm前後、尾は29.0～45.0cm前後、前腕長30.0～37.0cm前後。黒褐色系、暗灰褐色系の体毛を持つ。

生態は、昼間の隠れ家は家屋で、日没後に飛び立ち餌を求め、日の出前に隠れ家に帰る。食べ物は主に小型の飛翔昆虫である。

c) リュウキュウユビナガコウモリ

リュウキュウユビナガコウモリは奄美大島以南の南西諸島（奄美大島・沖永良部島・沖縄島・久米島・石垣島・西表島）に生息していることが知られている。

形態は、頭胴長50.0～60.0cm前後、尾は45.0～55.0cm前後、前腕長43.0～46.5cm前後。こげ茶色の体毛で、狭くて長い翼をもっている。

生態は、昼間の隠れ家は洞穴で、日没後に飛び立ち餌を求め、日の出前に隠れ家に帰る。食べ

物は主に小型の飛翔昆虫である。

(3) 兎目

奄美諸島に生息する兎目はアマミノクロウサギの1種であり、奄美大島、徳之島にだけ生息している。

a) アマミノクロウサギ

アマミノクロウサギ（ペンタラグス）は、1896年にアメリカ人ファーネスによって奄美大島で採集された世界で最も珍奇なウサギで、ムカシウサギ亜科に属するウサギである。世界的にみると、同じ亜科に属するものとして、中南米産のメキシコウサギ（ロメロラグス）と南アフリカ産のアカウサギ（プロノラグス）の2種がいる。この亜科には他に10属が含まれるが、何れも絶滅し化石でしかみることのない化石種である。このことからアマミノクロウサギは生きた化石として有名で、さらに、奄美大島と徳之島だけに棲む固有種でもある。国指定の特別天然記念物。

形態は頭胴長43.6～47.0cm前後、尾は3.5cm前後。本土のノウサギより小さい。体色は背面が焦げ茶色、個体によっては灰色を帯びるものもある。下面は淡く茶色を帯びる。カイウサギやノウサギに比べ目や耳は小さい。足は短く、爪は強力で穴など掘るのに適する。

生態は夜行性で、子供は秋の終わりと春に生まれる。一腹一頭。母兎はほかのウサギに邪魔されない行動圏の外れに、子育て用の穴を作って子供を隠し、夜授乳に訪れる。巣を離れるときは、再び入り口を塞ぐ習性がある。

(4) げっ歯目

奄美諸島に生息するげっ歯目にはハツカネズミ・アマミトゲネズミ・クマネズミ・ドブネズミ・ケナガネズミの5種がある。ハツカネズミ・クマネズミ・ドブネズミは奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島および与論島に、アマミトゲネズミ・ケナガネズミは奄美大島、徳之島にそれぞれ生息している。

a) ハツカネズミ b) クマネズミ c) ドブネズミ

古く船舶により移入されたもので、真の野生種ではない。本種は本土産のものと大差ないためここでは省略する。

d) アマミトゲネズミ

アマミトゲネズミは奄美大島で1924年日野氏により発見された珍しいネズミで、ごく最近まで徳之島での生息は知られていなかった。しかし、地元の人や研究者の間で徳之島にもアマミトゲネズミがいるらしいという話が出てきて、1983年著者は徳之島町母間で本種を1個体採集報告している。奄美大島・徳之島に生息する。国指定の天然記念物。

形態は頭胴長12.0～14.0cm前後、尾は9.5～11.4cm前後。クマミズミに体型は似るが小さい。本種の特徴である針状毛はいわゆる棘は暗灰色で先が黒い。体の背面は黒色と琥珀色の毛が混じる。下面は灰白色で琥珀色を帯びる。

生態は夜行性。ジャンプ能力に優れ、移動方法もカンガルーに似ている。餌はシイの実などであるが、昆虫も食べることが分かっている。

e) ケナガネズミ

ケナガネズミは日本特産の巨大なネズミで、南西諸島の奄美大島・徳之島・沖縄島にだけ分布する体長60cmもあるウサギ大のネズミである。

形態は頭胴長25.0cm前後、尾は33.0cm前後。名前が示すように、背面に長さ6cmに及ぶ長い剛毛が普通の毛に混じって生えている。また、尾の先3分の1が白いことが大きな特徴である。体色は背面が茶色で下面は象牙色を帯びた白色。

生態は夜行性。生息域は原生林の中で、本土のリスと似たようなニッチェ（生態的な位置）を示し、樹上生活をしている。餌はシイの実やマツの実などであるが、バッタなどの昆虫も好んで食べる。

(5) 食肉目

奄美諸島に生息する食肉目にはホンDOIタチとマングースの2種がある。これらはいずれも人為的に持ち込まれた移入種である。

a) ホンDOIタチ

奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島および与論島でみられる。本種は野ネズミを退治する目的で移入されたもので、真の野生種ではない。土着の野生動物を捕食するため希少動物の保護の面から考え脅威となっている。

形態・生態については、本種は本土産のものと大差ないため、ここでは省略する。

b) マングース

奄美大島でみられる。本種は猛毒蛇ハブや野ネズミを退治する目的で移入されたもので、真の野生種ではない。土着の希少野生動物を捕食するため希少動物の保護の面から考え脅威となっている。特に、国指定の特別天然記念物であるアマミノクロウサギにとっては本種の存在は脅威である。

形態・生態については移入種のため省略する。

(6) 偶蹄目

奄美諸島に生息する偶蹄目はリュウキュウイノシシの1種である。

a) リュウキュウイノシシ

リュウキュウイノシシは奄美大島と徳之島に生息している。リュウキュウイノシシはニホンイノシシよりだいぶ小型であり、アジアイノシシ系のイノシシのうち最も原始的な種と言われている。本種はアマミノクロウサギやケナガネズミなどの南西諸島特産の哺乳類同様、南西諸島の島々がまだ大陸とつながっていた鮮新世にアジア大陸に広く分布し、かつ繁栄していたイノシシの生き残り（遺存種）と推定され、系統分類学および進化学上での価値が高い動物である。

形態は頭胴長85.0cm前後、尾は14.0cm前後でニホンイノシシ（頭胴長137.0cm前後、尾は23.0cm前後）よりずっと小さい。四肢は比較的短く、首と胴との境目は極めて不明瞭。吻（鼻・口）は著しく長く円筒形。目は小さく、耳は三角形。頭頂から肩、そして背にかけて長毛を生ずる。体色は茶色～黒色と変異がある。

生態は夜行性。生息域は原生林の中。雑食性で何でも食べる。奄美大島・徳之島では最大の動物といえる。徳之島のリュウキュウイノシシ個体群は保護対策が必要で、地域個体群（保護に留意すべき地域個体群）として環境庁編・レッドデータブックに記載されている。

参考（引用）文献

- 阿部 永. 1994. 日本の哺乳類. 東海大学出版会. 東京
- 朝日 稔. 1977. 日本の哺乳動物. 玉川大学出版部. 東京
- 朝日 稔・川道武男. 1991. 現代の哺乳類学. 朝倉書店. 東京
- 文化庁. 1975. 天然記念物緊急調査植物図・主要動物地図, 143pp. 鹿児島県. 国土地理協会. 東京
- 今泉古典. 1960. 原色日本哺乳類図鑑. 保育社. 大阪
- 環境庁. 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—. 日本野生生物センター. 東京
- 大嶺哲雄. 1987. 琉球列島の動物分布特性と遺存種(1). 遺伝, 41巻, 7号. 78—83
- 大嶺哲雄. 1987. 琉球列島の動物分布特性と遺存種(2). 遺伝, 41巻, 8号. 55—59
- 鮫島正道. 1983. 沖永良部島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所南日本文化. 第16号115—135
- 鮫島正道. 1985. 徳之島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所南日本文化. 第17号. 115—143
- 鮫島正道. 1986. 奄美大島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所南日本文化. 第18号. 89—120
- 鮫島正道. 1988. 奄美大島の哺乳動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所南日本文化. 第20号. 99—111
- 鮫島正道. 1989. 加計呂麻島・与路島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所南日本文化. 第21号. 83—97
- 鮫島正道. 1991. 与論島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所南日本文化. 第24号. 71—84
- 鮫島正道. 1993. 奄美大島の野生動物の現状と保護対策. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所南日本文化研究所叢書18. 175—189
- 鮫島正道. 1993. 徳之島の野生動物の現状と保護対策. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所南日本文化. 第26号. 117—128
- 鮫島正道. 1995. 東洋のガラパゴス. 南日本新聞社. 鹿児島
- 鮫島正道. 1995. 喜界島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所南日本文化. 第28号. 83—95
- Sasa Manabu. 1977. Animals of medical importance in the Nansei Islands in Japan. Shinjuku Shobo LTD
- 安間繁樹. 1982. アニマル・ウォッチング. 晶文社. 東京

（執筆者 鮫島 正道）

9 奄美の鳥類

奄美諸島は鹿児島県の最も南にあたり、奄美本島、喜界島、徳之島、沖永良部島および与論島の五つの島で構成されている。

南西諸島の野生動物は、日本本土の動物と比較して大変ユニークで、学術的にも貴重である。鳥類における動物地理学上の線は蜂須賀線といわれ、旧北区・東洋区の区分は沖縄本島と宮古島間に引かれた線が境界線として認められている。

奄美諸島の自然や動物は、今から約一千万年前の地質時代に起源を持ち、現在まで脈々とその姿をとどめてきた。生物相は古く、中国大陆や東南アジアでは既に絶滅してしまった種が遺存種（生きた化石）としていまだに生存している。この現象は、ある時代に隔離され、外部からの肉食獣や競争相手になる生物などの進入がなく、大陸では考えられないような弱い生物がいまだに繁栄している。まさに奄美諸島は「東洋のガラパゴス」といえる。

地史的な変遷を経てできあがった奄美諸島は、高い部分が奄美大島や徳之島というような島になり、低い島はサンゴ礁の発達により陸地が拡がり喜界島、沖永良部島および与論島というような隆起サンゴ礁の島になった。特に奄美大島や徳之島は貴重で珍しい生き物が多い。

鳥類は国の天然記念物に指定されたルリカケス・オーストンオオアカゲラ・オオトラツグミ・アカヒゲ・カラスバトがある。奄美産の鳥類について環境庁編 レッドデータブック（日本の絶滅のおそれのある野生生物）の掲載種を見ると、絶滅危惧種（絶滅の危機に瀕している種または亜種）としてアマミヤマシギ・オーストンオオアカゲラ・オオトラツグミがある。危急種（絶滅の危険が増大している種または亜種）としてカラスバト・アカヒゲ・ルリカケスがあり、稀少種（存続基盤が脆弱な種または亜種）にはベニアジサシ・エリグロアジサシがある。

奄美の鳥類に対する一般的な記述には鹿児島県(1975)(1987)、環境庁(1981)、清棲(1952)、小林(1976)、日本鳥学会(1974)、高野(1980)(1982)、鮫島(1995)がある。文化財(天然記念物)に指定された鳥類ならびにレッドデータブック掲載種については文化庁(1975)、環境庁(1991)、鮫島(1993)(1993)がある。奄美諸島の各島ごとの鳥類相については迫(1968)や鹿児島短期大学付属・南日本文化研究所の南西諸島学術調査での筆者の報告がある。

上記の文献や資料を参考にし一部に著者の知見を加え、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島および与論島の鳥類相を各グループごとに概説する。また、奄美諸島産鳥類分布状況は表-1のとおりである。奄美諸島本来の鳥として、ここでは留鳥だけに留め、奄美諸島に訪れる渡り鳥や旅鳥は対象からはずした。

(1) コウノトリ目

奄美諸島の鳥類のコウノトリ目の中で留鳥はリュウキュウヨシゴイ・クロサギの2種がある。リュウキュウヨシゴイは奄美大島・徳之島・沖永良部島・与論島で記録されており、クロサギは奄美諸島全島でみられる。

a) リュウキュウヨシゴイ

ヨシゴイ類は、アシ原の中で巧みに背景に溶け込む擬態を行うのが特徴である。奄美諸島に生息するヨシゴイ属はリュウキュウヨシゴイであり、分布は奄美大島以南に留鳥として普通に生息

表－１ 奄美諸島産鳥類の分布表

* 既存文献および著者確認種

科 名	種 名	奄美大島	喜界島	徳之島	沖永良部島	与論島
サギ科	リュウキュウヨシゴイ	*		*	*	*
	クロサギ	*	*	*	*	*
ガンカモ科	カルガモ	*	*	*	*	*
ワシタカ科	ツミ	*		*		*
ミフウズラ科	ミフウズラ	*	*	*	*	*
クイナ科	リュウキュウヒクイナ	*	*	*	*	*
	バン	*	*	*	*	*
シギ科	アマミヤマシギ	*		*		
カモメ科	ベニアジサシ	*		*		
	エリグロアジサシ	*				
ハト科	カラスバト	*		*	*	*
	リュウキュウキジバト	*	*	*	*	*
	リュウキュウズアカオバト	*	*	*	*	*
フクロウ科	リュウキュウコノハズク	*		*	*	*
カワセミ科	カワセミ	*	*	*	*	
	リュウキュウアカショウビン	*	*	*	*	
キツツキ科	オーストンオオアカゲラ	*				
	アマミコゲラ	*		*		
ツバメ科	リュウキュウツバメ	*	*	*	*	*
サンショウタイ科	リュウキュウサンショウクイ	*		*		
ヒヨドリ科	アマミヒヨドリ	*	*	*	*	*
ヒタキ科	アカヒゲ	*		*		
	イソヒヨドリ	*	*	*	*	*
	オオトラツグミ	*				
	リュウキュウウグイス	*	*	*	*	*
	セッカ	*	*	*	*	*
	リュウキュウキビタキ	*				
	リュウキュウサンコウチョウ	*	*	*	*	*
シジュウカラ科	アマミヤマガラ	*		*		
	アマミシジュウカラ	*		*		
メジロ科	リュウキュウメジロ	*	*	*	*	*
ハタオリドリ科	スズメ	*	*	*	*	*
カラス科	ルリカケス	*				
	リュウキュウハシブトガラス	*	*	*	*	*
19 科	34種（亜種含む）	34	18	29	21	20

する。

形態は全長は40.0cm前後でヨシゴイよりやや大きい。一見してレンガ色のサギである。雄は上面がすべて赤栗色で、下面は黄褐色、喉から胸にかけて1条の褐色の縦斑がある。雌は上面が暗色の栗褐色で、下面には数条の黒褐色の縦斑がある。雌雄とも嘴は黄色い。

生態は水田や湿潤なアシ原などを好む。水辺の小動物（昆虫・エビ・カニ・小魚・カエル・イモリ等）を食べている。

b) クロサギ

奄美諸島の島々の岩礁やサンゴ礁を白いサギが歩いている姿をよく見かける。一見シラサギに似るがクロサギの白色型である。分布は本州中部以南の温暖地の海岸に多い。特に奄美諸島の島々には多く生息する。

形態は全長は62.5cm前後。足は短くて、嘴が太い中型のサギで、コサギとほぼ同大。南西諸島には暗色型と白色型の2型がみられる。嘴、足は暗緑色。

生態は海岸の岩礁やサンゴ礁地域に生息。1～2羽で見られることが多い。グワーという鳴き声を出す。

(2) ガンカモ目

奄美諸島の鳥類のガンカモ目の中で留鳥はカルガモの1種で奄美諸島全島で記録がある。

a) カルガモ

カルガモは奄美諸島でも繁殖し、留鳥であるが数は少ない。冬期は数が多くなるが、殆どが冬鳥として渡ってきた個体である。

形態は、全長60.5cm前後、カルガモは他のカモと違い雌雄同色である。体色は褐色系で体の後半部ほど黒色味が強い。顔に2本の黒線が走り、嘴は黒くて先端は黄色で、足は橙色。

生態は湖沼・池・川・海岸等にすむ。雑食性。

(3) ツル目

奄美諸島の鳥類のツル目の中で留鳥はミフウズラ科のミフウズラ、クイナ科のリュウキュウヒクイナ・バンの3種がみられる。

a) ミフウズラ

ミフウズラは南西諸島の草原や畑地でみかける。特に奄美諸島では一般的である。

形態は全長は雄で13.4cm前後、雌で14.0cm前後。実際はスズメ大の鳥であるが、体が丸く太っているため大きく見える。ウズラより小さいが、外観はウズラそっくり。雌は雄より大きく鮮やかな羽色をしている。

生態は一般的な鳥と異なり、雌が求愛行動（ディスプレイ）をとる。農耕地や草原にいて、数も多い。主食は草の種子や若芽、昆虫類。一妻多夫。抱卵・育雛は雄が行う。

b) リュウキュウヒクイナ

リュウキュウヒクイナは奄美大島以南の島で知られており、奄美諸島では奄美大島・喜界島・

沖永良部島・与論島で留鳥である。

形態は、全長22.5cm前後、頭部、頬、前頸、上腹は赤茶色で後頸、背、翼は暗緑褐色。脇、下腹、下尾筒は白と黒の横斑。嘴は黄褐色で足は赤色。

生態は湖沼・池・川の水辺で繁殖する。夜間キョッ・キョッ・キョッと鳴く。

c) バン

バンは日本全土に夏鳥として飛来し、本州中部以南では冬を越すものも多い。奄美諸島ではよく見かける鳥である。

形態は全長は33.0cm前後、体は黒いが下面には灰色味がある。脇腹と下尾筒の両面には白色斑がある。嘴と額（額板）は赤いのが特徴。雌雄同色。

生態は湖沼、池、川等にすみ、水面を泳ぎながら餌を採る。クルルと鳴く。

(4) シギ・チドリ目

奄美諸島の鳥類のシギ・チドリ目の中で留鳥はアマミヤマシギ1種がある。

a) アマミヤマシギ

アマミヤマシギは奄美大島・徳之島の特産の大型シギで絶滅の危機に瀕している鳥。

形態は全長は36.0cm前後。ヤマシギに似ているがやや大きい。額は褐色、体はオリーブ色がかった茶色などの点で多少の違いが認められる。雌雄同色。

生態は森林の上を飛びながら、ウッーとかキチツという声を出す。繁殖期には、雄が自分の縄張りを主張するため夕方鳴きながら飛び回る。主食はミミズ。

(5) ハト目

奄美諸島の鳥類のハト目の中で留鳥はカラスバト・リュウキュウキジバト・リュウキュウズアカオバトの3種がある。

a) カラスバト

日本産のカラスバトの仲間にはカラスバト・リュウキュウカラスバト・オガサワラカラスバトの3種がある。しかし、この中のリュウキュウカラスバト・オガサワラカラスバトは近年になり絶滅したと言われている。残るカラスバトも危急種として保護されている。分布は伊豆諸島・五島列島・対馬・男女群島・屋久島・種子島・奄美諸島・沖縄諸島の海岸線に近い場所に生息している。国指定の天然記念物。

形態は全長40.0cm前後でキジバト・アオバトよりずっと大きい。雌雄同色。全身黒いが、紫や緑色の金属光沢が目立つ。尾の長いハトである。嘴は黒っぽく、足は赤みを帯びる。

生態は暖かい地方の海岸や島の常緑広葉樹の茂った林に生息している。木の実や花芽などを食べる。

b) リュウキュウキジバト

リュウキュウキジバトは日本各地にいるキジバトの亜種として分類され、南西諸島の固有種である。1羽か2羽で暮らしているのが普通であるが、秋から冬にかけては小さな群れを作ること

もある。分布は奄美大島・喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島・沖縄島。

形態は全長33.0cm前後。キジバトに似ているが、全体に灰褐色または淡いブドウ色が強い。雌雄同色。首の両側面には黒と青灰色の横縞模様の斑点がくっきりしている。遠目にはピンクがかって見える美しいハトである。

生態は平地から山地の林にすみ、集落付近や畑地でよく見かける。鳴き声はクー・クー、クー・クー、または低い声でデデッポーポー・デデッポーポーと繰り返す。

c) リュウキュウズアカアオバト

アオバトは、英名をフルーツピジョンといい、木から木へと果実を求めて渡り歩く果実食のハトである。嘴は木の実を丸ごと飲み込むのに都合よくできていて、大きく広げることができる。果実バトは、その肉が美味なので、昔は多くのハンターから狙われる運命にあった。

形態は全長35.0cm前後。キジバトよりはるかに大きい。雌雄同色。ズアカアオバトの名はあるが、本亜種には頭部に赤色に見える色彩は無い、全体にほぼ一様に暗緑色で上面はやや濃い。尾の付け根の腹面（下尾筒）は淡黄白色で、暗緑色の斑がある。緑色の美しい鳥。

生態は常緑広葉樹の深い自然林に生息する。人家近くの電線に止まる姿をよく見かける。尺八に似た音色と節回しで鳴き、奄美の森林内ではアオバトの大合唱も聞ける。

(6) フクロウ目

奄美諸島の鳥類のフクロウ目の中で留鳥はリュウキュウコノハズクの1種である。

a) リュウキュウコノハズク

奄美諸島に生息するコノハズクはリュウキュウコノハズクといい、コノハズクの亜種として分類されている。分布は奄美大島・徳之島などに特に多く、奄美大島以南の南西諸島に極めて普通に見られる。

形態は全長20.0cm前後。コノハズクの亜種。体色はコノハズクと同様であるが、やや濃色である。上面は灰褐色に暗褐色の斑がある。下面はやや淡い。頭部には小さい羽角を持ち、目（虹彩）は黄色。

生態は平地の林から奥深い森林まで広く見られる。コホッ・コホッという特徴のある声で夜明け前まで鳴き交わす。

(7) ブッポウソウ目

a) カワセミ

カワセミは本州以南で留鳥。特に南西諸島には多い。隆起サンゴ礁の島ではサンゴ礁の入江（海水）で見かけることもある。

形態は全長17.0cm前後。体に比べて頭が大きく嘴が長い。頭上、頬面、翼、尾は金属光沢のある緑色。背から上尾筒はコバルト色。目の下、胸から上腹は橙色。喉、頸側は白い。

生態は平地から山地の池、湖沼、川等に住み、水面から出た杭、竹、石等にとまって水中の魚を狙い、急降下して水中の魚を採る。

(8) キツツキ目

a) オーストンオオアカゲラ

オーストンオオアカゲラは奄美諸島のなかで奄美大島にだけ生息。主にこの島の原生林にすんでいる大型のキツツキである。国の天然記念物に指定され、また環境庁のレッドデータブックでは絶滅危惧種として保護されている。

形態は全長28.0cm前後。体色は赤と白と黒の斑の大型のキツツキ。オオアカゲラより著しく黒みが強い。

生態は山地の常緑広葉樹林に多く、単独で行動する。強く鋭い声でキョッ・キョッと鳴き、コッ・コッ・コッと木をつつく音が林内に響く。

b) アマミコゲラ

コゲラはキツツキ類の中で日本一小さく、数も多いキツツキである。しかし、奄美大島と徳之島に生息するアマミコゲラはコゲラの固有亜種であり、生息数はあまり多くない。

形態は全長15.0cm前後。スズメ大の小さなキツツキ。額から体の上面は黒褐色で、背と翼には白色の横斑がある。喉から胸にかけては白く、脇から腹にかけては褐色で濃い縦斑がある。雌雄ほとんど同色であるが、雄は目の後部に赤色の小斑がある。

生態は山地や低山の森林に周年生息する。ギー・ギー、あるいはギーツキツキツと鳴く。幅広い短めの翼をバタバタとはばたかせ、大きな波を描くように飛ぶ。他の種類の小鳥と混群をつくることがある。

(9) スズメ目

奄美諸島の鳥類のスズメ目の中で留鳥はツバメ科のリウキュウツバメ、サンショウクイ科のリウキュウサンショウクイ、ヒヨドリ科のアマミヒヨドリ、ヒタキ科のアカヒゲ・イソヒヨドリ・オオトラツグミ・リウキュウグイス・セッカ・リウキュウサンコウチョウ、シジュウカラ科のアマミヤマガラ・アマミシジュウカラ、メジロ科のリウキュウメジロ、ハタオリドリ科のスズメ、カラス科のルリカケス・リウキュウハシブトガラスの計15種である。

a) リウキュウツバメ

リウキュウツバメは奄美大島以南の琉球列島に留鳥として周年生息するツバメで橋の下や洞穴の入り口に近い部分の天井、人家の軒に、土で皿形の巣を作る。

形態は全長13.0cm前後。雌雄同色。ツバメより小さくて尾は短い。頭から首にかけてはツバメに似るが、喉の黒い帯がなく、腹部は灰褐色。

生態は市街地や集落でよく見かける。特に家畜やそれらの排泄物のおおいに昆虫が集まるためか、牛舎や養鶏場周辺に集まり、飛び交っている。さえずり、地鳴きともにツバメの声に似ている。

b) リウキュウサンショウクイ

リウキュウサンショウクイはかなり高い空を鳴きながら飛んでいることが多いので、姿を見つけるより先に、声で確認することの方が多い。奄美大島の森林で澄んだ甲高い、ヒリヒリン・

ヒリヒリンと鈴を振るような声を頭上高くに聞いたら、この種と思ってよい。分布は奄美大島・徳之島・沖縄島で繁殖し、ときに南九州に渡来することもある。

形態は全長20.0cm前後。雄はサンショウクイの雄に似るが、額の白色部が狭くて（本種は4mmぐらい、サンショウクイ15mmぐらい）体の上面は黒みが強く、胸から脇が灰黒色。

生態は見晴らしのきく高い木の梢に止まる習性があり、飛翔中にもよく鳴く鳥である。

c) アマミヒヨドリ

ヒヨドリ類の翼は体に比べて短いため、一般的に飛翔力が弱く、一年中同じ地域に住んでいて亜種になったものが多い。アマミヒヨドリは奄美大島・徳之島で繁殖し、渡りをしない。日本本土のヒヨドリの一部が冬鳥として奄美諸島に渡ってくるので、冬季は2種（亜種）が混合する事になる。

形態は全長26.5cm前後。雌雄同色。体色は全身暗青灰色で尾は黒っぽく見え、ほとんどヒヨドリと同様であるが、体形はヒヨドリより小型である。

生態は常緑広葉樹林に多いが、島内の至る所で見られる。食物は主に種々の果実だが、花の蜜も吸う。

d) アカヒゲ

アカヒゲは国の天然記念物に指定され、手厚く保護されている。分布は種子島・屋久島・トカラ列島・奄美大島・徳之島・男女群島。

形態は全長14.0cm前後。雄は上面全体がオレンジがかった濃い赤褐色で顔から喉・胸にかけて黒く、腹面は白色の美しい鳥。雌は上面が雄より薄い赤褐色、喉・胸の黒い部分が無く、下面は灰色と白との斑模様。

生態は常緑広葉樹林にすむ。特に溪流や峡谷に沿った密林や藪に生息する。好奇心の強い鳥で、人間の近くまで接近して来ることもある。声量のある澄んだ声で、ピッピッビルルルルとかピックラララとさえずる。

e) イソヒヨドリ

奄美諸島のいずれの島でも、海岸線で最も普通に見られる鳥である。この鳥は人をあまり恐れないため、かなり近づいて観察できる。イソヒヨドリをはじめてみた人は、美しい鳥として強く感激するようである。初心者が奄美大島の鳥観察をするときルリカケスと誤認することがある。分布は全国各地に留鳥として生息。特に奄美諸島では高密度に生息している。

形態は全長23.5cm前後でムクドリ大の中型鳥。雄は頭部・背・喉から上胸部が暗青色、腹部は赤褐色、翼や尾は黒っぽい。雌は頭部・背・喉は暗灰色、下面は全体が暗褐色を帯びたクリーム色で鱗状の模様をしている。

生態は海岸や島の岩礁・岩場にすむ。主食は地上の昆虫類であるが、海岸の小動物もかなり食べる。ツツ・ピーコー・ツツ・ピーコーと澄んだ声でさえずる。

f) オオトラツグミ

オオトラツグミは昭和46年に国の天然記念物に指定された鳥で、奄美大島に限り生息するトラツグミの亜種である。この鳥は、現在では奄美大島の中でも湯湾岳一帯と金作原の原生林が主な

行動域である。

形態は全長は雄が32.5cm程度、雌26.5cm程度でツグミ類中最大。雌雄同色。一見黄色っぽい鳥に見えるのはトラツグミと全く同様であるが、脇と尾の付け根の下尾筒がトラツグミより濃い。体は黄褐色の地に黒色の三日月形の斑をなしている。翼はやや黒っぽくて黄褐色の羽縁がある。全身鱗状の斑点だらけに見える、虎の模様に似ているのでトラツグミの名がついている。

生態は夜間谷間を下り、山麓の水田などでミミズや昆虫などを食べ、早朝薄暗いうちに山頂近くに移動するといわれている。生息数は少なく、生態はよく分かっていない。

g) リュウキュウウグイス

奄美諸島に生息するリュウキュウウグイスは本土のウグイスと比較してさえずりの時期が多少ずれるようである。最近、研究者によっては奄美諸島の中でも奄美大島では繁殖していないとの見解を出す人もいる。分布はトカラ列島・奄美大島以南の島々。

形態は全長15.5cm前後だが、雄はやや大きい。雌雄同色。体色、体形ともにウグイスに似るが、体の上面は暗灰オリーブ色である（ウグイスはオリーブ色）。

生態は高山から低山、森林から集落付近まで密生した藪があれば生息する。さえずりは一般的にはホーホケキョだが、地鳴きは笹鳴きとも言われ、チャツ・チャツと鳴く。

h) セッカ

奄美諸島の草地や耕作地は「草原の鳥セッカ」の天国かもしれない。すみ心地の良い環境なのであろうか、とにかく高密度で見られる。特に喜界島・沖永良部島・与論島には全域に生息している。本州以南の草原で繁殖する。

形態は全長12.5cm前後でスズメより小さい。雌雄同色。冬羽は背面黄褐色で黒色小縦斑がある。下面は淡色。尾は比較的長く、先端は白いのが特徴。夏羽は頭・背面とも黒っぽくなり、尾には赤みがでている。

生態は一夫多妻型。草原性の鳥で、森林内では見かけない。鳴き方に特徴があり、飛びながらヒッ・ヒッ・ヒッと高い声で鳴き、舞い降りる時にはチョチョッ・チョチョッと鳴く。

i) リュウキュウサンコウチョウ

リュウキュウサンコウチョウは奄美諸島の全島で見かけ、日本本土のサンコウチョウより高密度で生息しているようである。声に特徴があるので所在の確認はしやすいが、姿を見つけ出すのは難しい。サンコウチョウの仲間は、日本の小鳥の中では最も尾の長い、熱帯系の優美な鳥である。

形態は全長はサンコウチョウの雄で44.5cm前後、雌17.5cm前後だが、リュウキュウサンコウチョウはそれよりやや小型。体色はサンコウチョウと全く同様で、雌雄同色。雄の尾は極めて長い。頭部から胸にかけてと尾は紫黒色、背面は赤紫色、嘴と目の周りはコバルト色。頭に小さな冠羽がある。

生態は常緑広葉樹林に繁殖する。薄暗い林の中を好み、林の外で見ることは少ない。鳴き声は歯切れよく、ツキヒホシ・ホイホイホイとかチツチョホイ・ホイホイホイと聞こえる。地鳴きはジッまたはギッと聞こえる濁った声である。

j) アマミヤマガラ

アマミヤマガラは奄美大島・徳之島の林内で普通に見かける鳥で森の小鳥の代表格である。他のカラ類の群れに交じっていることが多い。ヤマガラは定住性が強く、一般に遠距離の移動はしない。このために地域ごとに多くの亜種に分化している。アマミヤマガラは奄美大島・徳之島・沖縄島に生息するヤマガラの亜種である。

形態は全長は14.0cm前後でスズメ大の鳥。シジュウカラより尾は短く、太って頭も大きく見える。雌雄同色。額・頬はクリーム色で、体の上面は褐色を帯びた暗い灰色。体の下面はヤマガラより濃い栗色である。

生態は常緑広葉樹林を好む。嘴と足を器用に使い堅い木の実を両足で挟み、嘴で割って食べる。また、木の実を樹皮の隙間などに貯える習性がある。囀りはシジュウカラに多少似ているが、ややテンポの遅い声でツーツーピー・ツーツーピーと鳴く。地鳴きはニーニーニー・ビービービーと鼻声のように聞こえる。

k) アマミシジュウカラ

アマミシジュウカラは奄美大島と徳之島に生息するシジュウカラの亜種である。林内で普通に見かける鳥である。本種も他のカラ類の群れに交じっていることが多い。

形態は全長は14.0cm前後でスズメよりちょっと小さいが尾は幾分長い。シジュウカラよりやや小型。雌雄同色。頭と喉は黒く、頬は大きく白色が目立つ。背面は青灰色。腹は白地に喉から続く黒帯びが中央を縦に走る。雄はこの黒帯びが幅広く、さらに下腹部で太いが、雌は細い。

生態は常緑広葉樹林を好む。嘴と足を器用に使い堅い木の実を両足で挟み、嘴で割って食べる。囀りはツツピー・ツツピーあるいはツツピン・ツツピンと力強く鳴きつづける。地鳴きはチッ・チッとかジुकジुकジुकと鳴く。

l) リュウキュウメジロ

リュウキュウメジロは奄美諸島・沖縄諸島に留鳥として生息するメジロの亜種である。日本産のメジロの分布状態から考えて、奄美諸島で見られるメジロの仲間では、夏期間の繁殖期に見られるメジロはリュウキュウメジロということになるが、冬季のメジロには日本本土から南西諸島に渡る本土産のメジロが加わることになるため2亜種が混合する事になる。

形態は全長は11.5cm前後でスズメよりずっと小さい。雌雄同色。体色はメジロに似るが、体側は淡いクリーム色である（メジロは淡褐色）。メジロは目の周りが白い羽毛で縁取られているところからメジロ（目白）と名付けられた。

生態は常緑広葉樹林に最も多い。数十羽の群れをつくり、他種の小鳥と混群をつくる。森林内の虫も食べるが、木の実やツバキなどの花蜜も吸う。鳴き声はチー・チー。警戒の声はキリキリキリと囀る。

m) スズメ

スズメは全国的に留鳥として多数生息。奄美諸島でも普通にみられる。

形態は全長は14.5cm前後。スズメは最も一般的であるため形態・生態の説明は省略する。

n) ルリカケス

ルリカケスは奄美大島にだけ生息する固有種で国指定の天然記念物になっている。奄美大島全域にみられるが、北部のスタジイなどの少ない笠利町ではこの鳥は少ない。また、人の住む集落から奥深い森林地帯まで広く分布している。

形態は全長38.0cm前後、ハトより小型で日本本土のカケスより大きい。雌雄同色。頭上から背の前部・上胸は美しい瑠璃色で、翼と尾は黒っぽい瑠璃色。この「ルリ色」からルリカケスの名がついている。背・下胸・腹・尾の付け根は瑠璃色を帯びた赤栗色。顔と喉は黒く、喉には細い白斑がある。翼羽と尾羽の先端部も白く、飛ぶときに目立つ。嘴は太くて青白色。

生態は常緑広葉樹林に最も多く、2～6羽の群れをつくる。習性はカケスに似ている。食性は雑食であるが、特にシイやカシの実を好んで食べる。鳴き声はカケスより鋭くギャー・ギャーまたはゲューイ・ゲューイとも鳴く。人間に対する警戒心が強い。

o) リュウキュウハシブトガラス

リュウキュウハシブトガラスは奄美諸島の全島に生息していることになっている。しかし、最も大きい奄美大島は例外として、他の島々のガラスの数は流動的で一定していない。これは島嶼という環境、さらに害鳥として人為的な淘汰が行われることなど、その変遷を如実に物語っている。

形態は全長47.5cm前後、ハシブトガラスより小型。全身黒色だが、ハシブトガラスに比べ、紫色の金属的な光沢が強い。頭、嘴は大きく、足も太い。

生態は、食性は雑食で特に自然界の死体の始末屋さんといわれるように、道路上の動物の死体をよく食べる。鳴き声はハシブトガラスと同じ。



アマミヤマジギ



アマミシジュウカラ

参考（引用）文献

- 文化庁、1975. 天然記念物緊急調査植物図・主要動物地図, 143. 鹿児島県、国土地理協会、東京
鹿児島県、1975. 鹿児島の野鳥. 鹿児島県環境局環境保全課
鹿児島県、1987. 鹿児島県の野鳥. 鹿児島県保健環境部環境管理課

- 環境庁. 1981. 日本産鳥類の繁殖分布. 大蔵省印刷局. 東京
- 環境庁. 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—. 日本野生生物研究センター. 東京
- 清棲幸保. 1952. 日本鳥類大図鑑Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ. 講談社. 東京
- 小林桂助. 1976. 原色日本鳥類図鑑. 保育社. 大阪
- 黒田長久. 1967. 鳥類の研究—生態—. 新思潮社. 東京
- 黒田長久. 1979. 動物地理学. 共立出版株式会社. 東京
- 松田道生. 1985. 野鳥の調査—バードカウント入門. 東洋館出版社. 東京
- 森岡弘之・中村登流・樋口広芳. 1984. 現代の鳥類学. 朝倉書店. 東京
- 日本鳥学会. 1974. 日本鳥類目録. 学習研究社. 東京
- 日本鳥類保護連盟. 1965. 野外観察用鳥類図鑑. 凸版印刷. 東京
- 岡本久人・市田則孝. 野鳥調査マニュアル—定量調査の考え方と進め方. 東洋館出版社. 東京
- 迫 静男. 1968. 奄美大島の鳥類—海中公園センター調査報告. 鹿児島県海中公園学術調査報告 139—151
- 鮫島正道. 1983. 沖永良部島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第16号. 115—135
- 鮫島正道. 1985. 徳之島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第17号. 115—143
- 鮫島正道. 1986. 奄美大島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第18号. 89—120
- 鮫島正道. 1989. 加計呂麻島・与路島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第21号. 83—97
- 鮫島正道. 1991. 与論島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第21号. 71—84
- 鮫島正道. 1992. 奄美大島の鳥類. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第21号. 71—84
- 鮫島正道. 1992. 奄美大島における森林性鳥類相に関する研究. 鹿児島県自然愛護協会. 自然愛護. 18. 4—7
- 鮫島正道. 1993. 奄美大島の野生動物の現状と保護対策. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所 南日本文化研究所叢書18. 175—189
- 鮫島正道. 1993. 徳之島の野生動物の現状と保護対策. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第26号. 117—128
- 鮫島正道. 1994. 奄美大島湯湾岳の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第27号. 59—65
- 鮫島正道. 1995. 喜界島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第28号. 83—95
- 鮫島正道. 1995. 東洋のガラパゴス. 南日本新聞社. 鹿児島
- 高野伸二. 1980. 野鳥識別ハンドブック. 日本野鳥の会. 東京
- 高野伸二. 1982. フィールドガイド—日本の野鳥. 日本野鳥の会. 東京

(執筆者 鮫島 正道)

10 奄美の両生・爬虫類

奄美諸島は鹿児島県の最も南にあたり、奄美本島、喜界島、徳之島、沖永良部島および与論島の五つの島で構成されている。

奄美諸島の両生類・爬虫類は、日本本土のそれと比較して大変ユニークで、学術的にも貴重である。種子島・屋久島のさらに南のトカラ列島に渡瀬線という動物地理学上の線があり、その線を境に北が旧北区、南が東洋区として区分されている。島伝いの移動能力に欠けた爬虫類・両生類はこの線で動物相ががらっと変わる。鹿児島県は日本で唯一、温帯系の動物相と熱帯系の動物相を持っている県であり、動物の多様性に富み、天然記念物に指定された動物が集中している地域である。

奄美諸島の自然や動物は、今から約一千万年前の地質時代に起源を持ち、現在まで脈々とその姿をとどめてきた。生物相は古く、中国大陸や東南アジアでは既に絶滅してしまった種が遺存種（生きた化石）としていまだに生存している。この現象は、ある時代に隔離され、外部からの肉食獣や競争相手になる生物などの進入がなく、大陸では考えられないような弱い生物がいまだに繁栄している。まさに奄美諸島は「東洋のガラパゴス」といえる。

地史的な変遷を経て出来上がった奄美諸島は、高い部分が奄美大島や徳之島というような島になり、低い島はサンゴ礁の発達により陸地が拡がり喜界島、沖永良部島および与論島というような隆起サンゴ礁の島になった。特に奄美大島や徳之島は貴重で古いタイプの珍しい生き物たちが多い。

両生類・爬虫類には天然記念物に指定されたものはないが、沖縄県指定の天然記念物と同じ種（イシカワガエル・イボイモリ）が奄美大島や徳之島に生息している。奄美産の両生類・爬虫類について環境庁編 レッドデータブック（日本の絶滅のおそれのある野生生物）の掲載種を見ると、危急種（絶滅の危険が増大している種または亜種）としてイシカワガエル・オットンガエルがあり、稀少種（存続基盤が脆弱な種または亜種）にはイボイモリがある。

奄美の両生類について古くはInger, R. F., (1947), (1950)により世界の学会に紹介された。奄美諸島の両生類・爬虫類についての報告は半澤(1935), 木場(1955)(1956)(1958)(1959)(1959), 鮫島(1987)(1993)がある。南西諸島の両生類・爬虫類相の特異さについては大嶺(1987)(1987), 伊藤(1984), 木崎(1975)があり、各種類ごとの一般的解説は中村・上野(1963), 前田・松井(1989), 松井(1976)(1977), 鮫島(1995), 千石(1979)がある。特殊両生・爬虫類については環境庁(1981)(1991), 環境庁野生生物保護行政研究会(1993)がある。奄美諸島の各島ごとの両生・爬虫類相については鹿児島短期大学付属・南日本文化研究所の南西諸島学術調査での筆者の報告がある。

上記の文献や資料を参考にし一部に著者の知見を加え、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島および与論島の両生類・爬虫類相を各グループごとに概説する。また、奄美諸島産両生類・爬虫類の分布状況は表-1, 2のとおりである。

(1) 両生綱

① サンショウウオ目

奄美諸島に生息するサンショウウオ目にはイボイモリ・シリケンイモリの2種がある。イボイモリは奄美大島、徳之島に、シリケンイモリは奄美大島に生息している。

表－１ 奄美諸島産両生類の分布状況

* 既存文献および著者確認種

科 名	種 名	奄美大島	喜界島	徳之島	沖永良部島	与論島
アマガエル科	ハロウエルアマガエル	*	*	*	*	*
アカガエル科	リュウキュウアカガエル	*		*		
	ウシガエル（移入）	*		*		
	ヌマガエル	*	*	*	*	*
	ハナサキガエル	*		*		
	イシカワガエル	*		*		
	オットンガエル	*				
アオガエル科	アマミアオガエル	*		*		
	リュウキュウカジカガエル	*	*	*	*	*
ジムグリガエル科	ヒメアマガエル	*	*	*	*	*
イモリ科	シリケンイモリ	*				
	イボイモリ	*		*		
5 科	12 種	12種	4	10	4	4

表－２ 奄美諸島産爬虫類の分布状況

* 既存文献および著者確認種

科 名	種 名	奄美大島	喜界島	徳之島	沖永良部島	与論島
ヤモリ科	ヤモリ	*	*	*	*	*
	ホオグロヤモリ			*	*	*
	タシロヤモリ	*		*		
	オンナダケヤモリ	*				
	オビトカゲモドキ			*		
アガマ科	キノボリトカゲ	*	*	*	*	*
カナヘビ科	アオカナヘビ	*	*	*	*	*
トカゲ科	ヘリグロヒメトカゲ	*	*	*	*	*
	バーバートカゲ	*		*		
	オオシマトカゲ	*	*	*	*	*
メクラヘビ科	メクラヘビ	*	*	*	*	*
ナミヘビ科	アマミタカチホヘビ	*				
	リュウキュウアオヘビ	*	*	*	*	*
	アカマタ	*		*	*	*
	ガラスヒバア	*	*	*	*	*
コブラ科	ヒャン	*				
	ハイ			*		
クサリヘビ科	ヒメハブ	*		*		
	ハブ	*		*		
8 科	19 種（亜種含む）	16	8	16	10	10

a) イボイモリ

イボイモリは奄美大島・徳之島・沖縄島・渡嘉敷島にのみ生息。琉球列島の固有種。個体数は少ない。

形態は全長15cm前後。全身黒褐色で、わずかに肛門の周り、足の裏、尾の下側に赤色もしくはオレンジ色がかった斑がある。皮膚には多数のイボがあり、大きな肋骨が左右に傘を広げたように張り、その形はちょうど背中に木の葉を乗せたように見える。

生態は夜行性で主に森林内に生息するが、徳之島では森林に接する農耕地や林縁でよく見られる。昼間は落ち葉、朽木、石などの下に潜んでいる。

b) シリケンイモリ

シリケンイモリは奄美大島・沖縄島・渡嘉敷島に生息。個体数は多い。体型が手裏剣に似ているところからシリケンイモリ（手裏剣イモリ）という名になった。

形態は全長は雄11cm前後、雌14cm前後。体型は本土でよく見られるアカハライモリ（通称イモリ）に似ているが、これよりはるかに大きい。体色には変異が多い。しかし、指趾が比較的太短くて、その下面は黄色またはオレンジ色をしていることは共通している。腹面はオレンジ色だが、赤みの強いものもある。背面が白い個体も見つかる。

生態は低地の海岸線に近い集落の周りから、山の山頂の水溜まりまで広く分布しており、水田や池、林道の水溜まりで多数見ることが出来る。

② カエル目

奄美諸島はカエル類の宝庫と言われており、カエル類にはハロウエルアマガエル、ヒメアマガエル、リュウキュウアカガエル、ヌマガエル、ハナサキガエル、イシカワガエル、オットンガエル、リュウキュウカジカガエル、アマミアオガエルそしてウシガエル（移入種）の10種が生息している。

a) ハロウエルアマガエル

日本に生息するアマガエルの仲間には本土のニホンアマガエルと南西諸島のハロウエルアマガエルの2種がある。ハロウエルアマガエルは、ブイー ブイー ブイー ブイーと体に似合わず大きな声で鳴く。ホオズキを鳴らすような音がする。

奄美大島・奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島および沖縄島に生息している。

形態は体長4cm以下、ニホンアマガエルより体は細く、頭は小さい。背面は一樣に緑色から暗緑色で、ニホンアマガエルに見られるような褐色の模様が現れない。

生態は湿地や川の近くに多いが、民家の近くの樹木や草むらでも見られる。長期にわたり雨が降らない時などは、バショウやクワズイモなどの葉柄などの付け根にもぐり込んでいる個体もある。

b) ヒメアマガエル

アマガエルの仲間でないのにヒメアマガエルと名付けられたカエルであり、実はジムグリガエルの仲間である。ジムグリガエルは熱帯地方には種類が多く、全世界で200種ほど見つかったている。日本には琉球列島にヒメアマガエルの1種だけが分布している。

分布は奄美諸島以南の琉球列島・台湾・中国南部、東南アジア。

形態は体長3 cm以下、日本産のカエルで最小。頭部が小さいため背面から見ると三角形のカエルに見える。背面は褐色で、頭部から左右後方の大きな褐色斑が特徴。

生態は道路などの縁の土の中に潜っている。鳴き声はよく聞かれるが、姿はめったに見つからない。止水であれば、どこでも産卵する。3月から始まる繁殖期には雄が水溜まりに集まり、鳴き声を競い合う。体に不釣り合いの丈夫な足を持ち、ジャンプ力が優れている。

c) リュウキュウアカガエル

日本にはアカガエルの仲間は、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、タゴガエル、エゾアカガエル、オキタゴガエル、ツシマアカガエル、チョウセンヤマアカガエル、そして奄美・琉球諸島のリュウキュウアカガエルの8種がある。

分布は奄美大島・徳之島・沖縄島。

形態は体長3.5～4.5cm前後。雌はやや大きい。背面は全体的に赤褐色、腹面は白色。上唇の上半分が白い。首の付け根辺りのV字形の黒斑、鼻・目・鼓膜にかけて三日月形の黒斑、腿の横縞の上にある低い隆起が特徴。

生態は産卵期は冬期で12月から1月。水量の少ない沢や溝などが産卵場となる。100～200個ほどの卵を石などに付着させるようにして産みつける。

d) ヌマガエル

ヌマガエルの分布域は、東南アジア・中国・台湾・インドなど極めて広い。日本では名古屋から西の本州・四国・九州および琉球列島である。ヌマガエルは奄美諸島のすべての島で最も一般的なカエルである。

形態は体長3.5～5.5cm前後。ツチガエルに似るが、イボがなく、腹面が白いことで区別できる。地域によりかなり変異がある。皮膚は、外見ではイボのような隆起が見える個体もあるが、滑らかである。奄美諸島産では、背面の体色が暗緑色の個体も見られる。

生態は本土産のものと差はなく、流れのあまりない水辺、特に水田や溝、溜め池などの浅い場所に産卵する。平地の水田・湿地などでごく普通に見られる。

e) ハナサキガエル

ハナサキガエルは山地森林の溪流にすむが、林道などの開けた場所でもよく見かける。溪流や森林を歩いていて、大型のカエルが大きくジャンプしたら、まずこのカエルと思ってよい。

分布は奄美大島・徳之島・沖縄島・石垣島、西表島に生息する琉球列島の固有種。

形態は体長7～9 cm前後。体は細く、頭部は細長い。足が長く、スマートな大型ガエル。ハナサキガエルの特徴の一つに体色の変異がある。全体に茶褐色のもの、基色は灰褐色で緑斑があるもの、緑斑が多く背面が完全に緑色のものまである。変異が多いので、体色・斑紋による種の同定は避けた方がよい。

生態としては、繁殖期は12月下旬から始まり、産卵場は、大小の滝や急流により水しぶきのかかるような環境に産卵する。

f) イシカワガエル

イシカワガエルは大型で、緑色の地肌に鮮やかな金色の斑紋を持ち、日本産のカエルの中で最

も美しいという定評がある。個体数は非常に少ない。奄美大島と沖縄島の固有特産種で、沖縄県指定の天然記念物である。分布は奄美大島と沖縄島であるが文献によれば徳之島にも生息するとあるが、著者の今までの調査では確認できていない。

形態は体長10～13cm前後。背面は濃い緑色で、無数のイボがある。イボの周りは黄金のしずくを落としたような斑紋が見られる。

生態は奄美大島の繁殖期は3月から5月頃で、溪流に沿って鳴き声が聞かれ、溪流の流れの音を打ち消すようにヒョウー・ヒョウーと鳴く。

g) オットンガエル

オットンガエルは世界中で奄美大島だけに生息する学術的に貴重なカエルである。文献には一般的に山地森林にすむ大型ガエルと書かれている。しかし、生息密度は森林が高いものの、低地の民家の周囲や海岸線に隣接する所などでも結構見かける。奄美大島全域に生息しているようである。

形態は一見ヒキガエルに似る。体長14cmを超すものもいる。ほとんどのカエルの前足の指は4本だが、このカエルは5本ある。この特徴はホルストガエルとともに両生類には珍しく、両種はバビナ属としてアカガエル属とは区別されている。背面の皮膚は茶褐色でイボがあり、黒褐色のやや大きいイボが交じる。前足の第一指は鋭い棘になっていて、捕獲時に刺されたり、引っ搔かれたりして血を出すおおけがをすることがある。特にこの棘は雄に発達しているが、雌の棘は痕跡的になっていて皮膚が被さっている。これは雌雄鑑別の特徴の一つにもなっている

鳴き声は人の呼ぶ声にも似る。繁殖期は5月頃から夏にかけて最盛期を迎える。昆虫、カタツムリ、サワガニなどを食べる。

h) リュウキュウカジカガエル

日本には本州・四国・九州の山地の溪流にすむカジカガエルと近縁種で琉球列島にすむリュウキュウカジカガエルの2種がある。リュウキュウカジカガエルはトカラ列島の口之島より南の島にすむ南方系のカエルで、奄美諸島では全島でみられ、個体数の多いカエルである。

形態は日本本土のカジカガエルよりかなり小さい。体長は雄が2.5～3cm前後、雌が3～3.5cm前後で雌が大きい。背面の体色は変異が多く、変化も速い。背面の皮膚には不規則な顆粒が散在するが、とりわけ目の上の皮膚に顆粒状のザラザラがあること、肩の中央寄りにある大型のX字状の隆起は特徴である。

鳴き声はキュリユリユリユリユ・・・チチッと聞こえる。森林や崖道の水辺にすみ、水田や水溜まりのほか塩分の混じる水域にも産卵する。繁殖期は3月から8月。奄美大島では最も個体数の多いカエルである。

i) アマミアオガエル

日本にすむアオガエルは本土のモリアオガエル・シュレーゲルアオガエルと南西諸島のアマミアオガエルの3種がある。南西諸島のアオガエルはアマミアオガエル・オキナワアオガエル・ヤエヤマアオガエルの3つの地方型（亜種）に区分され、それぞれの代表的地名が付けられている。奄美諸島では奄美大島と徳之島に生息している。

形態は、体長は雄で3～5cm前後、雌で5～8cm前後と雌が大きく、雌雄差がはっきりしてい

る。背面の皮膚はごく弱い鰭肌状で、細かい顆粒が散在し、環境によって明るい緑や暗緑色に変色する。腹面は灰白色や黄白色がある。

鳴き声はクリリリ、クリリリ、クリリリと聞こえる。産卵は1月下旬頃から始まる。水面の上に伸びた木の枝や草の葉に直径7cm前後の泡状の卵塊がみられる。

j) ウシガエル

ウシガエルは人間によって持ち込まれた移入種で、現在、奄美諸島では奄美大島の属島の与路島と徳之島で見られる。移入種の存在は在来の野生生物にとっては脅威であり、淘汰の必要性がある。形態・生態は本土のウシガエルと同じであるためここでは省略する。

(2) 爬虫綱

① 有鱗目（トカゲ亜目）

奄美諸島で確認されている有鱗目（トカゲ亜目）は、ヤモリ科のヤモリ・ホオグロヤモリ・タシロヤモリ・オンナダケヤモリ・オビトカゲモドキ、アガマ科のキノボリトカゲ、カナヘビ科のアオカナヘビ、トカゲ科のヘリグロヒメトカゲ・バーバートカゲ・オオシマトカゲがある。

a) ヤモリ

日本本土では人家等の建造物周辺によくみられるが、奄美諸島ではそういった場所はホオグロヤモリが占拠しており、ヤモリは集落周辺の林や森林・山地に生息している。

分布は日本では本州・四国・九州・対馬・奄美諸島・沖縄諸島である。

形態は全長10～12cm前後、指下薄板（指の裏にある横ひだ）の中央が二分していない（ホオグロヤモリは二分している）。

生態は夜行性でクモ・ガ・ハエなどの昆虫類を食べる。卵は樹皮の間や岩の割れ目などに産卵される。卵は固く乾燥に強い。

b) ホオグロヤモリ

夜になると灯に集まり、人家の壁や天井を走り回り、ケッケッケッケツ・・・と騒ぎ立て、人間が笑っているような鳴き声を出すヤモリがいるが、これが南方系のヤモリ科ナキヤモリ属のホオグロヤモリである。

分布は徳之島以南の南西諸島・小笠原諸島・台湾・中国南部・東南アジアなどの熱帯である。

形態は全長9～11cm前後、尾は全長の半分ぐらい。体色は灰色から褐色までいろいろ。尾の背面には円錐形の鱗が6個ぐらいずつ横に並んで多数の突起環を形成していることが、この種の特徴とされている。

生態は徳之島・沖永良部島・与論島では、日が暮れ電灯をつける時間になると、灯に集まる昆虫を食べるため集まってくる。年間を通じて見られるが、出現数は温度に左右されるらしく、寒くなれば姿を見せない。

c) タシロヤモリ

タシロヤモリは琉球列島以南の亜熱帯・熱帯に広く分布している。国内では初めて、宮古島で田代安定氏によって記録され、発見者の名にちなんで田代氏の名前が付けられた。

分布は琉球列島・台湾・中国南部・東南アジアなどに広く分布。

形態は全長10cm前後。体型は同属のホオグロヤモリに似ているが、尾に突起環ないこと、体表の鱗がほぼ同じ大きさで、大型の粒状鱗が混じっていないことにより区別されている。

生態は夜になると昆虫を食うために電灯に集まる。ナキヤモリ属に分類されているが、声は低く、あまり鳴き声を聞くことはない。

d) オンナダケヤモリ

オンナダケヤモリは国内では沖縄島の恩納岳から初めて記録されたため、このヤモリの名前がそれにちなんで付けられた。

分布は奄美諸島・沖縄島・宮古島・石垣島・石垣島・西表島・与那国島・台湾以南の島々。

形態は全長10～12cm前後。このヤモリはフトオヤモリ属に属するこのヤモリは、名前どおり幅広い偏平な尾を持っており、後肢の後ろには皮膚の皺が見られる。皮膚は非常に弱い。

生態は夜電灯に集まるということは少なく、むしろ暗い場所を好むため、他のヤモリとの共存が許されていると言える。

e) オビトカゲモドキ

オビトカゲモドキは徳之島だけにいるトカゲモドキの固有亜種で、クロイワトカゲモドキの亜種として分類されている。この仲間のクロイワトカゲモドキは沖縄島に、マダラトカゲモドキは渡嘉敷島・渡名喜島・久米島に分布している。

形態は頭胴長7～8cm前後。亜種間では背面の模様の違いが認められる。オビトカゲモドキは背面に3本、頸部に1本、紫色の横帯がある。捕獲される個体の尾の模様や形態に著しい差があるが、これは尾の自切・再生によるものと思える。

生態として徳之島全域で見られるが、特に石灰岩地域や山地の森林、石のごろごろした溪流などで見かける。

f) キノボリトカゲ

キノボリトカゲは樹上生活に適応したトカゲで、アガマ科に属している。体色を変えることができ森の中では保護色になり、見つけにくい。分布は奄美諸島と沖縄諸島の全域で見られる。

形態は尾が非常に長く、体長の半分以上を占める。頭胴長は雄で7～8cm前後、雌で6～7cmと雄よりも雌が小さい。全身鱗に覆われている。背面の体色は鮮明な緑から褐色まで著しく変化する。

生態は昆虫食でセミを好んで食べるため、セミの多い森でよく見かける。民家の庭先にも出現し愛嬌のあるトカゲである。夏に1～4個の卵を産む。

g) アオカナヘビ

アオカナヘビは緑色をしたおとなしいトカゲであり、昔は奄美の島々の草原で最も普通に見られる動物であったと言われている。しかし、最近はほとんど見かけなくなり、時々、奥深い山中の道で稀に見つかるだけになってしまった。分布はトカラ列島の小宝島と宝島・奄美諸島・沖縄諸島・宮古諸島。

形態は全長20～25cm前後。尾はその4分の3を占めている。雌雄の体色に違いがあり、雌は灰

側面が黄緑色、腹面は白っぽい淡黄色を帯びる。雄は白側線の上に太い茶色の縦線がある。

生態は仲間同士のテリトリーはなく、同じ場所に何匹もいることがある。春から秋の間が産卵期である。

h) ヘリグロヒメトカゲ

ヘリグロヒメトカゲは奄美諸島では海岸線近くのアダンやモクマオウの防風林から山地の奥深い原生林まで広く分布している。落ち葉が堆積した林床をすみかにしている。分布域は薩南諸島（硫黄島・竹島・黒島・口永良部島）・トカラ列島・奄美諸島・沖縄諸島。

形態は全長12cm前後の小型のトカゲ。体色は赤褐色で多数の斑点があり、皮膚はスベスベした感じがある。体側には黒褐色の縦帯が明らかで、特徴となる。足が著しく短い。

生態は平地でも山地でも生息し、湿った場所を好む。落ち葉に潜む昆虫や小動物を餌にしている。

i) バーバートカゲ

バーバートカゲはシイ・タブを中心とする森林地帯に生息していて、主にクモ類を食べていることが分かっている。同じトカゲの仲間でも平地性のオオシマトカゲやオキナワトカゲとは棲み分けが成立している。分布は奄美大島・徳之島・沖縄島。

形態は全長16cm前後、18cmに達するものもある。体色や斑紋は本土のニホントカゲに似る。同属のトカゲの幼体は鮮やかな色の尾が特徴であるが、本種は成体になっても幼体の色彩がよく残るといわれる。

生態は奄美諸島の中でも原生林の残っている大きい島に限られて、森林地帯に生息している。

j) オオシマトカゲ

オオシマトカゲは平地性のトカゲであり、奄美大島、徳之島では山地森林性のバーバートカゲとの間に、はっきりした棲み分けができています。分布域はトカラ列島の小宝島と宝島・奄美諸島に生息する。

形態は全長20cm前後に達する。形態的には本土のトカゲに似る。島ごとの変異が大きい。

生態は海岸線や平地に生息し、昆虫類や小動物を餌にしている。

② 有鱗目（ヘビ亜目）

奄美諸島で確認されている有鱗目（ヘビ亜目）は9種で、メクラヘビ科のメクラヘビ、ナミヘビ科のアマミタカチホヘビ・リュウキュウアオヘビ・アカマタ・ガラスヒバア、コブラ科ヒャン・ハイ、クサリヘビ科のヒメハブ・ハブの9種である。

a) メクラヘビ

大きさ・形・体の色はミミズそっくりで、生態も地中性で軟らかい土や腐葉土に穴を掘って暮らしている。分布はトカラ列島以南のほとんどの島々・熱帯地域。

形態は全長15～18cm前後。ミミズのような形態と体色をしている。体は円筒状で鱗に覆われている。尾は体長の2%と短く、尾の先端は尖っている。目は痕跡程度に確認出来る。

生態は地中性で軟らかい土や堆肥などにもぐり込み、昆虫を食べている。地表に出し観察する

と、ヘビの移動いわゆる蛇行をし、舌をペロペロと出す。

b) アマミタカチホヘビ

日本本土に生息するタカチホヘビのタカチホの名は、このヘビを日本人としては最初に発見した高千穂宜麿氏の姓に由来する。アマミタカチホヘビは奄美大島・沖縄島に分布している。最初奄美大島で発見されたのでアマミの名が付いている。

形態は全長20～55cm前後の小型のヘビ。ビーズのように鱗に光沢があり美しい。背面中央には細い黒条が一本走る。

生態は暗く湿った森林中を好み、朽木や腐葉土の中にいることがある。ミミズを食べることが知られている。

c) リュウキュウアオヘビ

リュウキュウアオヘビは草や木の葉の緑色に溶け込み、見つけにくい緑色した森林性のヘビである。分布域はトカラ列島の小宝島と宝島・奄美諸島・沖縄諸島に生息する。

形態は全長60～110cm前後の中型のヘビ。体色は褐色を帯びた緑色であるが、変異が大きく、2～4本の縦条を持つものから持たないものまで、鮮やかな黄緑から黒っぽいものまでである。特に徳之島産は褐色がかった個体が多い。

生態は森林にも畑地にも生息し、最も多い、一般的なヘビである。昼間に林道などを横切るヘビは本種である。特に水辺の草むらや湿った森林内を好むようである。カエル類やミミズを食べる。

d) アカマタ

アカマタはハブを襲って食べる蛇として有名である。土地の人はアカマタをハブよけの神様と大切にしたり、「アカマタのいる所にはハブはいない」とも信じている。事実、性質はかなり荒く、ヘビ類を好んで食べるヘビである。分布域は奄美諸島・沖縄諸島の固有種。

形態は全長80～200cm前後の大型のヘビ。背面は赤褐色で大きな黒斑の列を備え、腹面は黄白色の美しいヘビである。

生態は森林にも集落付近にも生息し、夜行性で、地上で活動する。餌の範囲は広く、カエル・ヘビ・トカゲ・魚・小鳥・ネズミなどを食べる。

e) ガラスヒバア

ガラスヒバアは尾がかなり長くスマートなヘビである。鹿児島本土で普通に見られるヤマカガシと同じ生態的地位を占めている。模様もそっくりで、分類的にも近い。分布域は奄美諸島・沖縄諸島のほとんどの島々。

形態は全長75～110cm前後の中型のヘビ。背面はやや緑がかった黒褐色に黄色の細い横帯がある。尾は長く尾長指数（体長に対する尾の長さ）は31で最も大きい（メクラヘビ2，ヒヤン・ハイ9，ハブ16，ヒメハブ18，リュウキュウアオヘビ・アカマタ21）。

生態は森林から集落付近まで、どこでも見られる。特に湿地や田の畦など水のある所を好むようである。夜でも昼でも活動する。

f) ヒヤン

ヒヤンは小型で美しいヘビだが、コブラ類に属する一種であり、猛毒を持っている。毒性は中枢神経毒であり、土地の人はこのヘビを大変恐れていて、あまり触ろうとしない。分布域は奄美大島とその属島（加計呂麻島・与路島・請島）。

形態は全長30～60cm前後の小型の美しいヘビ。背面はオレンジ色、腹面は黄白色。背面中央に1本の細い縦条があり、さらに数個の幅広い黒色横帯がある。尾は短く、尾端は円錐状（ボールペンの先のような形）に尖る。

生態は山地から平地まで生息し、夜でも昼でも活動する。生息数は非常に少ない。餌は小型の爬虫類。捕まえると、尾の先端を針でも差し込むように押しつける行動を見せる。

g) ハイ

ハイとヒヤンとは体色や模様に極端な違いがあるが、分類学的には同一種とされている。ヒヤンと同じく小型で美しいヘビだが、コブラ類に属する一種であり、猛毒を持っている。毒性は中枢神経毒であり、土地の人はこのヘビを大変恐れていて、あまり触ろうとしない。分布域は徳之島・沖縄諸島。

形態は全長33～55cm前後の小型の美しいヘビ。ヒヤンと同一種であるが、模様が違うため亜種として分類されている。背面はオレンジ色で、腹面は黄白色。3～5本の黒い縦条があり、さらに、その縦条を中断する細い横帯がある。尾は短く、尾端は円錐状（ボールペンの先のような形）に尖る。

生態は山地から平地まで生息し、夜でも昼でも活動する。生息数は非常に少ない。餌は小型の爬虫類。捕まえると、尾の先端を針でも差し込むように押しつける行動を見せる。

h) ヒメハブ

ヒメハブはハブに比べ動作は緩慢で攻撃性は弱い。夜の林道を車で走ると、あちこちの路上の水たまりの縁でカエルを捕食するために姿を現したヒメハブに出会うことがある。分布域は奄美大島とその属島・徳之島・沖縄諸島。

形態は全長30～80cm前後のズングリムックリの胴体をしている。体型はニホンマムシに似る。体色には赤褐色・灰褐色・暗褐色と変異がある。普通は体の背面が黄褐色または灰褐色で、暗褐色の大きな斑紋があり、腹面は暗褐色の斑点が散在する。頭は三角形で口先は平たく突出する。

生態は山地森林の湿った場所や水辺に多く、特に溪流沿いで見かける。餌は小型の哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類と幅広いが、中でもリュウキュウアカガエルを好んで食べる。ハブ毒ほど強くないが注意が必要。

i) ハブ

ハブ毒は血管系統に作用し、血球を凝集させ毛細管壁を破壊する。そのような毒を血液毒または出血毒と呼ばれる。血球を破壊したり、激しい出血をさせたり、体の組織を破壊し筋肉が崩れ落ち、致命傷になる場合が多い。最近は血清のおかげで死に至る人は少なくなった。咬傷経験のある人によれば、焼いた火箸を当てられたような激痛が持続するという。分布域は奄美大島とその属島・徳之島・沖縄諸島。

形態は全長100～220cm前後。体色は変異が多く、色によって金ハブ、銀ハブと呼ばれ、徳之島

には黒色のハブもいる。普通は背面が黄褐色で、暗褐色の不規則な独特の斑紋がある。頭は大きくて長い三角形。

生態は山地にも平地にも生息し、海岸の岩場にも姿を現す。夜行性だが、昼でも移動している。木登りも上手で、枝を伝いながら樹間を泳ぐように移動することもある。主な餌はネズミや小鳥であるが、その他いろいろな脊椎動物を食べる。



オットンガエル



リュウキュウアカガエル



ドーバートカゲ



ヘリグロヒメトカゲ

参考(引用)文献

- 半澤正四郎, 1935. 琉球群島に於けるハブの奇異なる分布と同群島地史との関係, 日本生物地理学会会報, 5, 175-198
- Inger, R. F., 1947. Preliminary survey of the amphibians of the Riukiu Islands. Fieldiana., zool. 32, 295-352
- Inger, R. F., 1950. Distribution and speciation of the amphibians of the Riukiu Islands. Amer. Naturalist., 84, 95-115
- 伊藤秀三, 1966. ガラパゴス諸島—「進化論」のふるさと, 中央公論社, 東京
- 伊藤正春, 1984. 生態, 進化論の観点から琉球列島弧とガラパゴス島との比較考察, 聖母女学院短大研究紀要13集
- 環境庁, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—, 日本野生生物研究センター, 東京
- 環境庁, 1981. 日本の重要な両生類・爬虫類—南九州・沖縄版, 大蔵省印刷局, 東京
- 環境庁野生生物保護行政研究会, 1993. 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律 中央法規出版, 東京
- 木崎甲子郎, 1975. 沖縄の自然—その生いたちを訪ねて, 平凡社, 東京
- 木崎甲子郎, 1980. 琉球の自然史, 築地書館, 東京

- 木場一夫. 1955. 奄美大島の爬虫類および両生類. 熊本大学教育学部紀要, 3. 145-162
- 木場一夫. 1956. 奄美群島の爬虫・両生相 (I). 熊本大学教育学部紀要, 4. 147-164
- 木場一夫. 1958. 奄美群島の爬虫・両生相 (II). 熊本大学教育学部紀要, 6. 173-185
- 木場一夫. 1959. 奄美群島の爬虫・両生相 (III). 熊本大学教育学部紀要, 7. 187-202
- 木場一夫. 1959. 奄美群島の爬虫・両生相 (IV). 熊本大学教育学部紀要, 8. 181-191
- 前田憲男・松井正文. 1989. 日本のカエル図鑑. 共立出版株式会社. 東京
- 松井孝爾. 1976. カエルの世界. 平凡社. 東京
- 松井孝爾. 1977. ヘビの世界. 平凡社. 東京
- 中村健児・上野俊一. 1963. 原色日本両生爬虫類図鑑. 保育社. 東京
- 大嶺哲雄. 1987. 琉球列島の動物分布特性と遺存種(1). 遺伝. 41巻 7号. 78-83
- 大嶺哲雄. 1987. 琉球列島の動物分布特性と遺存種(2). 遺伝. 41巻 8号. 55-59
- 鮫島正道. 1983. 沖永良部島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化. 第16号. 115-135
- 鮫島正道. 1985. 徳之島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化. 第17号. 115-135
- 鮫島正道. 1986. 奄美大島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化. 第18号. 89-120
- 鮫島正道. 1987. 奄美大島の両生類・爬虫類. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化. 第19号. 55-75
- 鮫島正道. 1989. 加計呂麻島・与路島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化. 第21号. 83-97
- 鮫島正道. 1991. 沖永良部島の動物 (II). 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化. 第23号. 101-114
- 鮫島正道. 1991. 徳之島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化. 第24号. 71-84
- 鮫島正道. 1993. 奄美大島における森林性両生爬虫類に関する研究. 鹿児島県自然愛護協会, 自然愛護. 19. 4-7
- 鮫島正道. 1993. 奄美大島の野生動物の現状と保護対策. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所 南日本文化研究叢書, 18. 175-189
- 鮫島正道. 1993. 徳之島の野生動物の現状と保護対策. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化. 第26号. 117-128
- 鮫島正道. 1994. 奄美大島湯湾岳の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化. 第27号. 59-65
- 鮫島正道. 1995. 喜界島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化. 第28号. 83-95
- 鮫島正道. 1995. 東洋のガラパゴス. 南日本新聞社. 鹿児島
- 椎原春一・鮫島正道. 1995. イシカワガエルの飼育下繁殖. 動物園水族館雑誌. 36(4). 101-105
- 千石正一. 1979. 原色両生・爬虫類. 家の光協会. 東京

(執筆者 鮫島 正道)

11 奄美の貝類

(1) はじめに

奄美諸島は喜界島、奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、徳之島、沖永良部島、与論島など8つの島からなっている。奄美諸島の貝類については黒田（1928）が1100余種を目録として発表したのが最初である。鹿児島県を模式産地とする貝は393種であるが、その56%（220種）は奄美諸島となっている。（表－1）

表－1 奄美諸島を模式産地とする貝と各島の固有種

	模 式 産 地 と す る 貝				固有種(固有亜種を含む)		
	総 数	海の貝	陸の貝	備 考	総 数	海の貝	陸の貝
喜 界 島	48	36	12	32 (化石)	7	0	7
奄 美 大 島	78	47	31		14	0	14
加 計 呂 麻 島	58	58	0	37 (ミツチキリオレ科)	0	0	0
請 島	1	0	1		0	0	0
与 路 島	3	1	2		0	0	0
徳 之 島	20	2	18		14	0	14
沖永良部島	9	1	8		6	0	6
与 論 島	3	0	3	2 (化石)	2	0	2
合 計	220	145	75		43	0	43

- 模式産地：新種を記載する際に使われた生物が採れた所
- 固有種：その島だけに住んでいる生物

島の大きさ、地形、地質がそれぞれ異なっており住んでいる貝の種類にも違いが見られる。これまでに知られている奄美の海と陸・淡水の貝について述べる。

(2) 海の貝

文献によると、奄美諸島に住む貝は化石種を含めて総数2078種が知られている。その内訳はヒザラガイ類が3科10種、巻貝類123科1699種、二枚貝類48科362種、ツノガイ類3科7種となっている。種数の多いのは巻貝類のフデガイ科（144種）次いでクダマキガイ科（130種）、アクキガイ科（107種）、イモガイ科（105種）、ミツチキリオレ科（91種）、タカラガイ科（75種）、ニシ

キウズ科(74種)などとなっている。イモガイ類やタカラガイ類、フデガイ類の多くは黒潮の特徴種で奄美、沖縄、台湾、フィリピンなどに共通種が多い。沿岸貝類の分布は海水表面温度の最低温度の支配を受けると言われる(山本, 1973)。長崎海洋気象台の資料をもとに、5年間の2月の海水表面温度の平均を等温線で示した日本全土の図を見ると、奄美諸島は20℃ラインとなり台湾と同じことになる。海岸で見られる貝の種類が沖縄や宮古、八重山、台湾地域と大差ないと言われることもうなずける。しかし、実際は水温のほかに海岸の様子(入り江、湾、リーフ、礁湖、砂浜の有無)は見逃せない要因といえる。

奄美諸島で特記すべき海産種が採れている喜界島、奄美大島、加計呂麻島についてその概要を述べる。

① 喜界島

ア 化石

喜界島は隆起サンゴ礁の島ではあるが、リーフや礁湖(ラグーン)が乏しく海岸で採れる生きた貝の種類は少ない。しかし、1934年、東北大学の調査により上嘉鉄北方から多くの化石が産出しNomura & Zinbo (1934)によって28種の新種記載がなされている。

イ 喜界島南西沖

名瀬漁協ではサンゴ採取業者と契約を結び、1983年(昭.58)から1984年にかけて喜界島南西沖(北緯28°15', 東経129°52')の水深250~280m付近でサンゴ採取をした。その時、リュウグウオキナエビス、コシタカオキナエビスのほかヒメダカラ、アケボノダカラ、コケミミズ、ヌリハダフデ、カブトカセン、トサカセン、カトレアバショウ、キイツブリ、マイヒメセンジュ、オガサワラガンゼキ、シラガボタル、アコメガイ、クサズリイモ、ナカヤスイモ、ユキタキヌハダヅツミなどのきわめて珍しい貝が水揚げされている。オキナエビス類は殻口外唇部に深い切れこみのある大変珍しい貝で生きた化石とよばれ、高価で売買されている。最も希産とされるリュウグウオキナエビスは殻径18cm、殻長14cmにもなる大形のオキナエビスでその分布は山本(1993)によると伊豆・鳥島西方約60km、土佐沖、東シナ海、東沙群島沖、台湾海峡南端、フィリピン、モルッカ諸島沖等となっている。

② 奄美大島

リーフが発達した笠利町、竜郷町、大和村の海岸では以前は採れる貝の種類も多かったが今は以前ほど採れなくなった。反面、食用として人が採らない貝は今でも多産している。

ア 笠利町土浜

満潮線付近の砂の中には1cm内外の微小貝が多数見出だされ新種として発表されたものにミジンギリギリツツ科のヒノイデミジンツツ、アマミミジンツツ、マガタマミジンツツ、ノノジガイ科のノシジガイ、タモトガイ科のフタオビモクメニナ、アサジガイ科のカケラガイなどがある。

イ 大島海峡

三浦、久根津、油井、油井小島の各地からモスソアコヤガイ、シュモクアオリ、クロシュミセン、マベガイ、ショジョウガイ、ホネガイ、ゴホウラ、オオジュドウマクラ、シロチヨウガイなどの記録があるが、1957年(昭.32)頃から道路工事による土砂の流入が激しく、サンゴの死滅によってシマウグイスやシュモクアオリも見られなくなり、また、クロタイラギも泥をかぶり殻を大きく開いて死んでいるとダイバーは語っていた。

ウ 名瀬湾

ヒラマキヒメカタベ、カザグルマヒメカタベ、チリメンケマンガイなどの新種が記録されてい

る。昭和30～40年、港の浚渫工事で海底の砂を揚げるためサンドポンプが使われた。その砂の中には奄美には現生しないフィリピンや南太平洋に住むベニシボリミノムシ、カノコシボリミノムシ、コリーフデガイなど多数の珍しい貝が採れた。コリーフデガイは日本未記録種として常陸宮正仁親王によって和名の新称がなされた。

エ 枝手久島

焼内湾ではミズイリショウジョウやイシワリマクラ、クリフミノムシ、チョウセンフデ、オオジュドウマクラ、ゾウゲタケ、クロタイラギ、ゴホウラなどが採れている。また、枝手久島沖から水揚げされた砂の中からは死殻ではあるが珍しいムカデソデガイが採れている。ムカデソデガイは平田（1956）によって与論島からの報告もある。

オ 住用村山間

住用川と役勝川の合流地点には広大なマングローブ原生林が発達しており、その林床の泥中にはマングローブ林特有のシジミ（汽水棲）が住んでいる。このシジミには形がやや丸いもの（丸型）と後方が少し伸びたもの（横長型）がある。実測してみると、丸型では殻長と殻高の比がほぼ1.08、横長型では1.17の値を示した。このシジミについては原色日本貝類図鑑（1954）ではシレナシジミとなっている。波部は1977年にマングローブシジミと改称した。さらに、1983年（平. 3）になると「ちりぼたん」において丸型をヤエヤマヒルギシジミ、横長型をリュウキュウヒルギシジミと再改した。住用村山間は両シジミの北限地である。

③ 加計呂麻島

加計呂麻島にはリーフや礁湖はほとんど見られないが多くの入り江や砂浜が各地に広がり、中でも安脚場からは多数の微小貝が新種として発表され一躍注目を浴びるようになった。古仁屋で土産店を営んでいた磨島豊彦氏が加計呂麻島・安脚場で精力的に収集した貝は河村良介氏に送られ、さらに小菅貞男氏の手によってミツクチキリオレ科の貝37種の新種が記載された。このように多数の貝が同一場所で発見された所は他に例をみない。

(3) 食用以外で人とかかわりの深い海の貝

① アンボイナ……ハブよりも強い毒をもつ貝

1896年（明.29）、竜郷町秋名で山田奥政氏（家名・七五郎）が「いざり」で採ったアンボイナをテルに入れて縁側に置いてあったところ、子供（2歳）が起きてきてテルの中のアンボイナをいじっていて左手首を刺され泣きわめいた。祖母がおぶってあやしている間に刺されたところが紫色になって膨れ、手当をする間もなく死亡したのである。それ以来、秋名ではこの貝のことを被害者の父の名を冠し「シチグロブトンニヤ」と呼び、海で見つけても決して採らないとのことである。「ブトンニヤ」は方言でイモガイ科の総称である。住用村山間でも1962年（昭.37）5月、幼児がアンボイナに刺され重態になり県立大島病院で手当を受けている。その後、名瀬市小湊でも漁師が潜水中アンボイナに刺され病院で手当を受けている。このほか、屋久島、与論島、沖縄、クインランド、オーストラリア等からも死亡事例が10例ほど報告されている。アンボイナの毒性を研究した人はその毒性は土人が矢じりに塗る毒に類似性があると話している。

② ホラガイ……オニヒトデを食べる貝

ホラガイがサンゴを食害するオニヒトデを食べることはよく知られている。和泊港近くの浅い所でホラガイを採取したことがあり、煮て肉を出して見ると胃の中にオニヒトデが丸ごと入っていてびっくりしたことがある。

③ マベガイ、シロチョウガイ、クロチョウガイ……真珠養殖の母貝

大島海峡や焼内湾、竜郷湾で行われている真珠養殖の母貝は天然では採れず自社で養殖してまかなっている。

④ スイジガイ……魔除けに使用

幼少の頃、沖永良部島では火の神（悪霊）を追い払うため、門に向けて軒下にスイジガイを下げているのをよく見かけたものであるが、今でも門柱に下げている家が一軒ある。1995年（平. 7）10月、竜郷町秋名の家々の門柱にスイジガイやクモガイを乗せてあるのを見た。古老に聞いてみるとスイジガイは魔除けのため、クモガイは福を呼び込むためだと話してくれた。昔の人々はスイジガイの角（突起）が6本あるのを見て、それが「水」の字に読めることからこの貝に火の神が屋敷内に入らないようお願いを託したのであろう。

(4) 陸・淡水の貝

奄美諸島には陸貝132種、淡水の貝が27種住んでいる。

① 喜界島

陸産23種、淡水産1種が記録されている。オオスミヤマキサゴ、キカイヤマタニシ、ネムリゴマガイ、キカイキセルガイモドキ、キカイノミギセル、アマミノミギセル、キカイキビ、キカイオオシママイマイ、ウラジロヤマタカマイマイ、キュウシュウケマイマイ、キカイウスカワマイマイ、トコヨマイマイは喜界島が模式産地である。この内、ネムリゴマガイ、キカイオオシママイマイ、ウラジロヤマタカマイマイ、トコヨマイマイは化石で記載された。しかし、キカイオオシママイマイとウラジロヤマタカマイマイは現生している。ネムリゴマガイ、キカイキビ、トコヨマイマイ、ウラジロヤマタカマイマイ、キュウシュウケマイマイは本島の固有種、キカイウスカワマイマイは固有亜種である。淡水産はタイワンモノアラガイが1種のみ報告されている。

② 奄美大島

陸産80種、淡水産26種の記録があり、模式産地とするものにケハダヤマトガイ、*Japonia citharella* (Gould, 1859)、オオヤマタニシ、オオシマムシオイ、オオムシオイ、オオシマアズキガイ、ハラブトゴマガイ、トウガタゴマガイ、オオシマゴマガイ、ヒメタニシ、オオシマキセルガイモドキ、ツムガタノミギセル、カドシタノミギセル、トウギセル、ホソウチマキノミギセル、ソトバウチマキノミギセル、ヒルグチギセル、オオシマギセル、ザレギセル、ネニヤダマシギセル、タカカサマイマイ、オオシママイマイ、クマドリヤマタカマイマイ、アマミヤマタカマイマイ、ケハダシワクチマイマイ、コケハダシワクチマイマイ、マメヒロベソマイマイ、マルテンスオオベソマイマイ、オオシマフリイデルマイマイ、オオシマケマイマイなど30種、また本島の固有種はオオシマムシオイ、カドシタノミギセル、トウギセル、ソトバウチマキノミギセル、ホソウチマキノミギセル、ネニヤダマシギセル、アマミヤマタカマイマイ、ケハダシワクチマイマイ、コケハダシワクチマイマイなど10種、固有亜種にはオオムシオイ、オオシマフリイデルマイマイなど2種がある。

住用村山間のマングローブの下にはドングリカノコ、シマカノコ、イナズマカノコ、フクロナリオカミミガイ、ヒロクチカノコ、カバクチカノコ、シイノミミミガイ、カタシイノミミミガイ、イシマキガイ、クロヒラシイノミガイなどが生息し独特の生態系を保持している。

③ 加計呂麻島

陸産18種、淡水産2種となっているが、模式種、固有種共に記録がない。

④ 請島

陸産5種、淡水産1種となっており、模式種はスミスヒメベッコウのみである。

⑤ 与路島

陸産3種、淡水産1種となっており、模式種、固有種共に記録がない。

⑥ 徳之島

本島については、現地調査報告の中で詳しく述べる。

⑦ 沖永良部島

陸産50種、淡水産5種の記録があり、ヤセオキナワヤマキサゴ、オキノエラブヤマトガイ、ウスチャイロキセルガイモドキ、ヒラコハクガイ、エラブシュリマイマイ、オキノエラブヤマトカマイマイ、ヒメユリヤマトカマイマイ、エラブマイマイの8種は本島を模式産地とし、その中で、ヒラコハクガイ、オキノエラブヤマトカマイマイ、ヒメユリヤマトカマイマイ、エラブマイマイの4種は本島の固有種、オキノエラブヤマトガイ、エラブシュリマイマイの2種は同じく固有亜種である。

オキノエラブギセル、チャイロノミギセルは湊(1994)によりそれぞれツヤギセル、ノミギセルの同物異名(シノニム)とされ姿を消すこととなった。

湊(1994)は生物地理学的考察の中で、沖永良部島産(クビキレガイ科、ヘソカドガイ科、オカミミガイ科を除く)26種の中には沖縄分布パターンと考える種類が多く、また、沖永良部島と与論島には奄美大島、徳之島、沖縄などに分布するヤマタニシ類とゴマガイ類などの前鰓類が分布しないことも特徴であると述べている。

トカラコギセルは本島を分布の南限とし、奄美大島、悪石島、諏訪瀬島、中之島、平島、屋久島、高知県足摺岬、愛知県蒲郡市竹島、幅豆町沖の島などに点々と分布している。

⑧ 与論島

陸産26種、淡水産1種の記録がある。ミジンサナギガイ、ヨロンヤマタカマイマイ、ヨロンジママイマイの3種は本島を模式産地とし、ヨロンヤマタカマイマイは本島の固有種、ヨロンジママイマイは固有亜種である。

(5) 中国大陸起源と見られる陸貝

奄美諸島には中国大陸起源と見られる種群が分布している(湊1980)。シワクチマイマイ属のケハダシワクチマイマイ(奄美大島)、コケハダシワクチマイマイ(奄美大島)、トクノシマケハダシワクチマイマイ(徳之島)、アツマイマイ属のエラブマイマイ(沖永良部島)、ニッポンマイマイ属のエラブシュリマイマイ(沖永良部島)、キンチャクギセル属のオオシマギセル(奄美大島、徳之島)、ザレギセル(奄美大島、徳之島)、ヒルグチギセル(奄美大島、徳之島)などがそれである。これらは寒冷期の陸続きだった時代に奄美諸島へ分布を広げ独特の分化をとげたものと考えられる。

(6) 分布上疑わしい陸貝

① トウギセル(キセルガイ科)

湊(1980)は「九州の貝」第14号においてPilsbryの原記載要約を述べた上、原記載とキカイノミギセル、キカイノミギセル変異のブリカを比較考察して次のように書いている。「Pilsbry(1909)の原記載のトウギセルに見られるようなブリカの構造をもつノミギセルの仲間が、奄美大島で再発見されたということを聞いたことがない。」

② アオミオカタニシ(ヤマタニシ科)

1995年(平.7)7月9日の南海日日新聞にアオミオカタニシの生態写真が奄美大島産として報道された。採取したのは瀬戸内町古仁屋の西川栄子、場所は篠川の畑の中、家に持ち帰り飼育

していたが93日で死んだとのことである。この貝はヤマタニシ科の中で唯一樹上性である。これまでの記録では与論島が北限であり、分布は沖縄、八重山諸島、台湾となっていた。今回、篠川で見つかったのは沖縄から移入した観葉植物に付いてきたとも考えられ分布上疑問が残る。

(7) 特殊病害虫とされる陸・淡水貝

① アフリカマイマイ *Achatina fulica* Bowdich, 1822

原産地は東アフリカ、食用かたつむりとしてシンガポールから台湾、沖縄を経て1937年（昭.12）頃徳之島へ、1938年（昭.13）から1943年（昭.18）に奄美大島へ、さらに1947年（昭.22）に与論島へ持ちこまれた。沖縄永良部島では1975年（昭.50）に発見されたが1991年（平.3）以降発生の報告はない（鹿児島県植物防疫のあゆみ、平成6年度）。沖縄永良部島でどのようにしていなくなつたのかその経緯を和泊町役場経済課の課長は沖縄からヤシなどの移入植物に付いて手々知名に入り、一時は繁殖したが人海戦術で徹底的に捕獲した結果2～3年で撲滅することができたと語った。したがって、現在は喜界島、沖縄永良部島を除く全域に広がっていることになり、奄美大島は分布の北限である。

春（5～6月）と秋（9～10月）、地中3～5cmの所に230個内外の卵を産む。ふ化後1年で成貝となり殻長10cm、殻幅5cm、重さ100gにも達する。奄美大島では3月下旬から活動し始め5～6月に活動が盛んとなり、サツマイモ、野菜、パパイヤなど多くの植物を好んで食べる。

アフリカマイマイは植物防疫法に基づき移動禁止害虫であるばかりでなく、人間に脳障害を起こさせる広東住血線虫の中間宿主として重大な関心がもたれている。

② アシヒダナメクジ *Laevicaulis alte* (Férussac, 1821)

東アフリカ、インド、セイロン、台湾などに分布しており殻をもたないが貝類の仲間である。

奄美諸島では昭和44年に徳之島、昭和48年10月瀬戸内町諸鈍、竜郷町戸口および竜郷、昭和52年10月沖縄永良部島、昭和53年11月名瀬市大熊および笠利町川内で発生が認められ、現在では奄美全島に生息している。

体長7～10cm体幅1.5cmにも達し体はやや平たく黒くビロード状である。普通のナメクジと違い夜間だけ行動して農作物を食い荒らす。防除薬剤としてはアフリカマイマイ同様メタルデヒド剤（誘殺剤）の粉末が効果をあげている。アシヒダナメクジもアフリカマイマイと同じように広東住血線虫の中間宿主である。

③ スクミリングガイ（ジャンボタニシ） *Pomacea canaliculata* (Lamarck, 1819)

スクミリングガイはアルゼンチン北部、ウルグアイ等中南米が原産地である。1980年初め頃から、長崎県島原市の養殖業者が食用として輸入し養殖を始めた。そこから九州各地へ広がったといわれる。奄美群島では1984年竜郷町で養殖していた貝が水路を流れて水田に侵入して稲を食害したのが最初とされている。1976年（昭.51）に沖縄でスクミリングガイからも広東住血線虫の幼虫が見つかり中間宿主であることが確認された。1995年10月、竜郷町秋名の水田で多数のスクミリングガイを確認した。



リュウキュウヒルギシジミ(横長型)



ヤエヤマヒルギシジミ(丸型)



アフリカマイマイ

参考文献

- 東 正雄. 1995. 原色日本陸産貝類図鑑〔増補改訂版〕. XVI 343pp. 80図版, 保育社, 大阪
- 碓 絹江. 1995. 奄美大島のシテナシジミ. 「九州の貝」, 44号. 43-46, 九州貝類談話会
- 吉良哲明. 1966. 原色日本貝類図鑑. 240pp. 保育社, 大阪
- 黒田徳米. 1928. 奄美大島産貝類目録. 126pp. 鹿児島県教育調査会, 鹿児島
- 黒田徳米. 1953. 日本陸産貝類の偉大なる採集者・平瀬与一郎先生ならびに平瀬氏を助けた採集者達. ゆめ蛤, 73:24-25
- 黒田徳米. 1963. 日本非貝産貝類目録. 71pp. 日本貝類学会, 東京
- 黒田徳米・菊池典男. 1968. 奄美徳之島の陸棲貝類, Venus,28(1):60, 本会類学会, 東京
- 小菅貞男. 1961. 奄美諸島のミツクチキリオレ科について(1). Venus,21(3):308-315, 日本貝類学会, 東京
- 小菅貞男. 1961. 奄美諸島のミツクチキリオレ科について(2). Venus,21(4):413-415, 日本貝類学会, 東京
- 小菅貞男. 1962. 奄美諸島のミツクチキリオレ科について(3). Venus,22(2):119-129, 日本貝類学会, 東京
- 小菅貞男. 1963. 奄美諸島のミツクチキリオレ科について(4). Venus,22(3):240-257, 日本貝類学会, 東京
- 小菅貞男. 1961. 奄美諸島のミツクチキリオレ科について(5)(追補). Venus,21(3):257-263, 日本貝類学会, 東京
- 桜井良三. 1986. 決定版 生物大図鑑 貝類. 399pp. 世界文化社, 東京
- 白井祥平. 1959. 最近の奄美大島の貝類について. 「貝類同好会々報」, 鹿児島貝類同好会
- 波部忠重. 1962. 続原色日本貝類図鑑. 182pp. 保育社, 大阪
- 波部忠重. 1975. 学研中高生図鑑, 貝 I, 301pp. 学習研究社
- 波部忠重. 1975. 学研中高生図鑑, 貝 II, 301pp. 学習研究社
- 波部忠重. 1977. 日本産軟体動物分類学 二枚貝綱／掘足綱. 372pp. 北隆館, 東京
- 波部忠重. 1983. 沖縄貝信(4). 「ちりばたん」, 13(4):92-93, 日本貝類学会, 東京
- 波部忠重・小菅貞男. 1967. 標準原色図鑑全集 貝. 222pp. 保育社, 大阪
- 肥後俊一・後藤芳央. 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録. 879pp. エル貝類出版, 大阪
- 平瀬信太郎. 1954. 原色日本貝類図鑑. 542pp. 丸善, 東京
- 福田 宏・増野和幸・杉村智幸. 1992. 概説 山口県の貝類. 99pp. 図版50, 山口県立山口博物館
- 湊 宏. 1969. 奄美群島陸海採集記(上). 「ちりばたん」, 5(8):253-256, 日本貝類学会, 東京
- 湊 宏. 1970. 奄美群島陸海採集記(下). 「ちりばたん」, 6(1):14-17, 日本貝類学会, 東京
- 湊 宏. 1978. 沖永良部島・与論島の陸産貝類相. 日本生物地理学会, 33(1), 1-8
- 湊 宏. 1980. 日本の陸産貝類の分布系統. 「動物と自然」, 10(13):6-9
- 湊 宏. 1980. トウギセルとキカイノミギセル. 「九州の貝」, 14:9-10
- 湊 宏. 1984. 日本産陸棲貝類の生殖器の研—X X II. キセルガイ科(8):イーストレーキコギセル属とヒロクチコギセル属. Venus,43(2):172-181, 日本貝類学会, 東京
- 湊 宏. 1988. 日本陸産貝類総目録. 294pp. 同目録刊行会. 和歌山
- 湊 宏. 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究. 211pp. 74図版, 日本貝類学会, 東京
- 山本愛三. 1973. 男女群島近海の高産貝類を中心とする生物相. 「男女群島の生物」:140-159, 長崎貝類学会, 長崎
- 山本愛三. 1993. 東支那海の貝類相. 「九州の貝」, 40-41 合併号:51-73, 九州貝類談話会
- 嶋田浩一・田中 章. 1994. 特殊病害虫特別防除事業の概要. 280pp. 鹿児島県植物防疫協会
(執筆者 行田 義三)

12 奄美の甲殻類

概要

今回の調査対象となった奄美地区には奄美大島、徳之島、喜界島などが含まれる。その西側には黒潮が流れており、本地区の気候はこの暖流の影響を強く受け亜熱帯気候を呈している。そして、各種生物相にもその影響は強くあらわれていると考えられる。

淡水域および汽水域を含めたいわゆる“陸水域”に生息する甲殻類は、おもにテナガエビ類、ヌマエビ類、サワガニ類、およびイワガニ類に属している。奄美地区の陸水産甲殻類に関する研究は、上田(1970)に始まり、その後、Minei(1973)、諸喜田(1975, 1979)、Shokita and Nishijima(1976)、諸喜田(1989)、鈴木・佐藤(1994)らにより行われた。これらの研究により本地区の陸水産コエビ類(テナガエビ類とヌマエビ類の総称)相が沖縄島よりも屋久島や種子島のコエビ類相と類似し、同時に、沖縄島と本土それぞれのコエビ類相の一部と共通することが明らかになった。一方、純淡水産のサワガニ類相は、本土や種子島、屋久島のそれとは全く異なり、むしろ沖縄島のサワガニ類相に類似することも明らかにされた。

このように同じ陸水産の甲殻類でも、コエビ類相は本地区の北に位置する屋久島や種子島と類似し、サワガニ類相は南に位置する沖縄島と類似しているのは、それぞれの生物相の本地区における地史的形成過程が異なっていることと、各種の生活史の違いが総合的に影響した結果と考えられる。生活史の中でも特に幼生の生活形や発育条件は大きく影響すると考えられる。

次に、既報の文献を参考に、奄美地区に出現する陸水産甲殻類の分布状況および幼生の生活形について各科ごとに概説する。

ヌマエビ科

本地区には、8種類のヌマエビ類が生息しており、オニヌマエビ、トゲナシヌマエビ(写真-1)、ヒメヌマエビ(写真-2)の3種は西太平洋に広く分布する種類である。また、ヌマエビ、ミゾレヌマエビ(写真-2)、ヤマトヌマエビ(口絵参照)、アシナガヌマエビ、サキシマヌマエビの5種は日本固有種もしくは東アジア地域に分布する種である。このうちアシナガヌマエビとサキシマヌマエビは琉球列島固有種で、沖永良部島が両種の分布北限となっている。特にアシナガヌマエビは宮古島のイザガ洞とモリカガ洞、沖永良部島の水蓮洞からしか採集されていない希少種である。

アシナガヌマエビとサキシマヌマエビの幼生の形態や生態についてはまだ明らかにされていない



写真-1 トゲナシヌマエビ

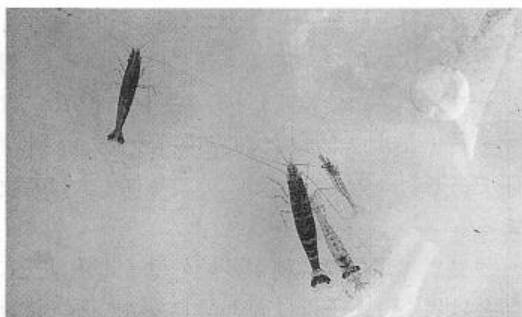


写真-2 ミゾレヌマエビ(中央)とヒメヌマエビ(左上)

いが、ヌマエビを除く他の5種の幼生は全て浮遊生活をし、海水中でないと発育できないことが知られている。このように生活史の中で淡水域と海水域を行き来する生物を両側回遊種という。ヌマエビも基本的には両側回遊種であるが、一部の地域では淡水域で生活史を完結しているヌマエビもいる。このように両側回遊種がダムなどの障害物で淡水域内に閉じこめられることを陸封という。

テナガエビ科

奄美地区には、スネナガエビ、スジエビモドキ（写真-3）、フトユビスジエビ、ミナミテナガエビ（口絵参照）、ヒラテテナガエビ（口絵参照）、コンジテナガエビ（口絵参照）、ザラテナガエビ（写真-4）、スベスベテナガエビの8種類が生息している。スネナガエビ、スジエビモドキ、フトユビスジエビの3種は体長3～4cmと、テナガエビ類の中でも小型のエビで、河口の汽水域に生息している。3種とも分布域は広く、西太平洋もしくはインド洋まで分布している。

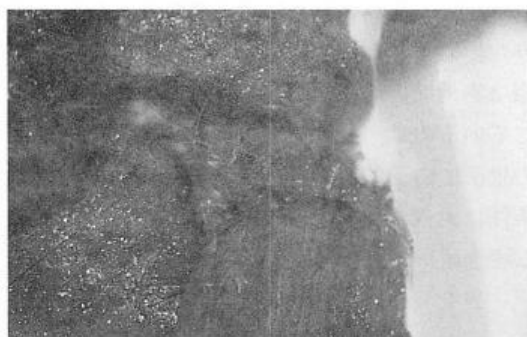


写真-3 スジエビモドキ

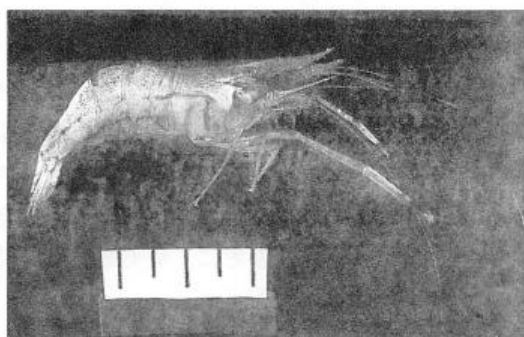


写真-4 ザラテナガエビ

ミナミテナガエビとヒラテナガエビは日本から台湾にかけての東アジアの地域に分布し、残りの3種（コンジテナガエビ、ザラテナガエビ、スベスベテナガエビ）は広くインド-西太平洋に分布している種類である。インド-西太平洋に分布する南方系の種の北限は、鹿児島県の熊毛地区になっているものが多い、しかしながらザラテナガエビやスベスベテナガエビは本地域以北では非常に希な種と考えられる。

奄美地区に出現するテナガエビ類8種は全て、両側回遊種と思われ、幼生は海水がないと発育できないようである。

サワガニ科・ミナミサワガニ科

奄美地区に生息が確認されているサワガニ類は2科2属4種であり、サワガニ科のリュウキュウサワガニ（口絵参照）、サカモトサワガニ（口絵参照）、オオサワガニとミナミサワガニ科のアマミミナミサワガニ（口絵参照）である。サワガニ科の3種は琉球列島の固有種で、本地区が北限である。一方、アマミミナミサワガニは徳之島の秋利神川を基産地とする本地区に固有の種である。

サワガニ類に固有種が多いのはその生活史に由来すると思われる。すなわち、他の陸水産甲殻類とは異なり、子供は親と同じカニの形態で卵から生まれ、ゾエア幼生などの浮遊幼生期を持たない。また、成体も海水中では生育できないため、他の個体群との遺伝的交流がなくなり隔離さ

れやすくそのため種分化が起きやすいと考えられる。水生生物の分布要因や種分化を考えるには格好の生物であろう。

スナガニ科

現在までに本地区の陸水域で報告されているスナガニ類は、ハクセンシオマネキとカワスナガニの2種のみである。これらは河口の汽水域の砂質干潟に分布している。

ハクセンシオマネキは日本から台湾にかけて分布するとされていたが、近年琉球列島に生息するハクセンシオマネキは、その亜種のオキナワハクセンシオマネキと言われている。2種の違いは大変微妙であるが、抱卵数の違いや、巣穴の周りにシェルターを作るかどうかなど生態的な違いが認められる。一方、カワスナガニは、鹿児島県を基産地とする日本固有種であり、現在のところ本地区が南限地域と考えられる。

スナガニ類として報告されているのは以上2種であるが、河口汽水域の砂質干潟に生息する生物は豊富であり、今後多くの河川の汽水域で調査を行えば、シオマネキ類、オサガニ類、コメツキガニ類、チゴガニ類などが確認されるであろう。

イワガニ科

奄美地区で報告されているのは、モクズガニ(写真-5)、オオヒライソガニ、ケフサヒライソモドキ、ヒメイワガニモドキ、ケフサイソガニ、クロベンケイガニ、アカテガニ、ベンケイガニ(写真-6)、フタバカクガニ、アシハラガニの10種である。前2種は淡水域と海水域を行き来する両側回遊種で、残り8種は河口の汽水域から淡水域あるいは陸上部にも生息する種類である。

本地区に出現する10種は、ほとんどが西太平洋や東アジア地域に広く分布する種である。しかしながら、ケフサヒライソモドキは本地区が北限と思われ、アカテガニは本州では普通種ではあるが、琉球列島地域では非常に希な種でもある。



写真-5 モクズガニ

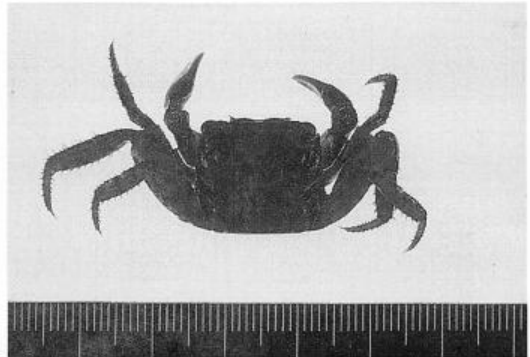


写真-6 ベンケイガニ

参考文献

- 上田常一. 1970. 日本淡水エビ類の研究. 213p. 園山書店, 島根
Minei, H. 1973. Potamoid crabs of the Ryukyu Islands, with descriptions of five new species (Crustacea, Decapoda, Potamoidea). Journal of Faculty of

Agriculture, Kyushu University, 17 : 203-226

- 諸喜田茂充. 1975. 琉球列島の陸水産エビ類の分布と種分化について－I. 琉球大学理工学部紀要（理学篇）, 18 : 115-136
- 諸喜田茂充. 1979. 琉球列島の陸水産エビ類の分布と種分化について－II. 琉球大学理学部紀要, 28 : 193-278
- 諸喜田茂充. 1989. 奄美大島の陸水産エビ類相と分布. 昭和63年度奄美大島調査報告書, 267-275
- Shokita, S. and Nishijima, S. 1976. Faunal list of Inland-water Malacostraca of Amami group, the Ryukyu Islands. Ecological Study on Natural Conservation of The Ryukyu Islands, II : 31-38
- 鈴木廣志・佐藤正典. 1994. かごしま自然ガイド 淡水産のエビとカニ. 137pp. 西日本新聞社, 福岡

（執筆者 鈴木 廣志）